女學

第貳百四拾柒號



明治二十四年十二月二十六日發兌

女鑑第貳百四拾參號

目録

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十四年十二月十九日印刷
明治三十四年十二月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 並木眞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
發賣元 靜思館
(電話本局一千三百七番)

社告

從來各所より御寄贈にかゝる新刊新聞雜誌及圖書等單に**國光社**とのみ御認めの分は往々當部へ着せず爲に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず**國光社女鑑編輯部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

東京京橋區築地貳丁目廿一番地國光社內

女鑑編輯部

稟告

本誌（女鑑）編輯に關する即ち原稿投書等の事件は必らず**女鑑編輯部**へ御送被下度候又發賣に關する總ての事件は必らず**靜思館**へ宛御發信被下度願上候也

東京京橋區築地二ノ廿一、國光社內

女鑑編輯部

（電話新橋八十八番）

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地

靜思館

（電話本局千三百七番）

本誌定價改正

壹册代金拾錢

六册代前金（三ヶ月分）五拾七錢

拾貳册代前金（半ヶ年分）壹圓拾錢

廿四册代前金（一ヶ年分）貳圓拾錢

全國無遞送料

本月より右の通相改め申候尤是迄前金御拂込濟の分は從來の定價に據り候也

明治卅四年九月

女鑑發賣元

靜思館

小松宮殿下御題辭
北白川宮妃殿下御序文
正五位勳三等足立寛氏述
日本赤十字社藏版

育兒談

製本クロース洋装全一冊
正價壹冊代金貳拾五錢
郵稅四錢●郵劵代用一割增

本書緒言に曰く『此冊子は日本赤十字社篤志看護婦人會幹事長殿下始め貴夫人令孃の予に小兒敎育の方法を質されたるに因り本會正科講義の後に於て每會其大要を一二箇條づゝ談話したる者を書集めたるなり云々』『此に於て淨書せしめ殿下に呈進するに及で復た之を上梓して普く世の婦女子に頒つべきの令命を蒙むれり是を以て遂に活版に上ぼすに方て更に傍訓を施せり是れ一般婦女子をして讀み且つ解し易からしめんが爲なり云々』と

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
日本赤十字發行所
電話本局千三百七番

取次販賣所

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女学校 閲

一河の中のきよき人かゝ

さゝ流もてまゐらせ毛

このいましめの

うれしさ 柳子書

小松宮殿下御題辭

北白川宮妃殿下御序文

正五位勳三等足立寬氏述

[illegible]

女学校　閣

一 河の中のうきしま人の
こゝにもつまみ毛
このいとめのこの
うれしみみのお

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小松宮殿下御題辭

北白川宮妃殿下御序文


正五位勳三等足立寛氏述

[illegible]

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

臺灣神社全景



北白川宮家御所藏

小川一眞製

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



北白川宮妃殿下御肖像

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑　第貳百四拾柒號

明治三十四年を送る

日にかはり、月にうつりて、明治三十四年も、あますところ僅に幾日といふに迫りぬ。この際にわたりての感慨は、讀者諸媛の募に應じて寄せられし、歳暮の感にて、大方は盡されたるべし。おしなべて、往を悔い、來む年に希望を繋くるは、いついづこを果と、きはまりなき世にしあれば、敢て、異とするに足らざるなり。たゞ、有望の聲を以つて迎へられし今年女子教育界の、意外に、良結果を見ること尠かりしは、抑、何故ぞ。蓋、女子教育の切要なることを唱導せられてより、茲に幾星霜、而かも、其の結果の見るべきもののなきは、其の論議するところ、着實穩當を缺くが故なり。着實穩當を缺くは、實行を主とせずして、徒に、縱論横議をのみ旨とするを以つてなり。其の結果の見るべきもののなきは、ひとり、三十四年に於いてのみ然るにあらず、今更に嘆ずべきにもあらざるべし。

要するに、從來の女子問題は、權利に關するもの〻み多くして、義務にかゝるも

のを疎にするの弊を免るゝ能はざるが如し。男女同權論の如き謬論は、一度、世の反抗に堪へかねて、其の影だに止めずなりしとはいへ、猶、女權擴張の名の下に出沒して、いまだ、全く、其の跡を絶つに至らず。近時、婦人にして、社會事業に盡瘁せむと企つるも、よく、世の同情を得る能はざるは、畢竟、彼の謬論の復起を顧慮するがためならずや。近年、非常の速力を以つて進歩したる、女子學校教育の結果についても、猶、非難の聲を止むる能はざるも、亦、これらの謬論の、隱に鼓吹せらるることあるを以つてなり。吾人は、女子の良朋を以つて任ずるものなり。豈に敢へて、所謂女權擴張を沮害せむとするものならむや。たゞ、其の議論、穩當を失ひ、着實を欲き、いたづらに空論にはしりて、女子の德操を毀くること、少々ならざるを憂ふればなり。明治三十五の女子問題を議せむとするもの、希くは、先づ、實行の點について考慮せられよ。



論說

武士道的女子教育

三輪田　眞佐子

古き書に、嘉肴あらんも食はざれば、その甘きを知らず、至道あらんも學ばざれば、その善を知らずとあり。實に、人は、我が知るところのみに偏する恐あり。例へば、明治維新後に生れて、維新前に於ける、國民の習慣及び氣風を知らざるものは、其の優劣を論ずる資格に乏しきは、止むを得ざるべし。亦、維新前に生れて、維新後に勃興したる社會の文物制度を知らず、即ち、時勢に棄てられたるものは、動もすれば、頑固に陷り易きこともあらん。唯、公平に、今日を以つて昔日に比して、其の是非得失を評價するに足るものは、維新前に現れし社會の光景を見しものにして、尙且、孜々汲々と、日進月歩の文運を研究し、寧ろ文明開化の魁をなすもの、即ち、新舊兩時代に跨り、敢へて、舊に拘泥せず、敢へて、新に心醉せず、以つて、中途を知るものに限るべし。而して、この任に當るものは誰ぞや。

勿論、今日の文明を以て、昔日の制度を論ぜんか、見るに足るもの殆どなしと雖も、國民の内部に潜む氣風の點より見れば、今日は、漸次退歩せし觀あり。如何となれば、明治維新前の社會は、武士道を以つて支配せられければ、國民、その義を重んずること今日より強く、その信を布くこと今日より深し。從ひて、君臣父子兄弟夫婦、及び、朋友の道等、整然として、犯すべからざるものあ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り。即ち、長を尊び、幼を助け、或は、强を挫き、弱を揚げゝる等、一般に俠客的の氣風あり。決して、今日の如く、賄賂を以つて是非曲直を顛倒する如き、陋習は少かりき。見よ。今日は、痴情若しくは、發狂を以つて自殺する例あらんも、正義のため身を棄て、亦棄てんとするものは少かるべし。是れ、武士道の廢れたる結果ならん。

そもく、武士道は、大和民族固有の氣質に、儒道の精神幷に禪學の精神をも混合して、發達したるものなれば、日本臣民の、最も重んずべき美風良俗なり。世の識者は、しばく、長を採り短を棄てよと言ふにあらずや。然るに、武士道は、維新前に盛なる國民道德の精華なり。故に、今日、國民敎育を以つて任ずるものは、武士道の復活を謀らざるべからず。蓋し、おのれの言ふ武士道は、强ち、劍を持ちて舞ひ、矛を以つて、走る如き、外部のものを指すにあらず、亦、封建制度と何の關係をも有するものにあらず、唯、國民の內部に存する、忠孝節義の發揚を期するに外ならず。されば、玆に武士道的女子敎育と言ふも、封建時代の女子を理想とするにあらず。武士道的國民道德を有する女子を、と思へばこそ。

山名氏淸の妻は、武士道的氣風を有せし、女子の一人と見て可ならんか。傳說の存する所に依れば、明德年間に、良人氏淸反を謀りて、戰破れけるとき、二人の子なる、兄左馬助と、弟七郎は、未練にも、父の運命盡きたるを見て、父を棄てゝ逃れけり。母これを聞きて、大に子の未練を怒りけり。時に、

しつむともおなしくこえんまてしはし
　くるしき海の夢のうきはし

と言ふ歌をば、去年氏淸より送りし文の端にかき

て、自害せり。折りしも、二人の子尋ね來りて、母を見んとせしが、母は、臨終に及びて、尙、顏をも向けず、二人の子を責めけるやう、苟も、弓矢とる身ながら、父のうたるゝを見すてゝ走る憶病もの、この世に、再びわれを見んことは許さじ。この上は、更に言葉をもかはさじと、殆ど、節義の化身とも言ふべき勢ありければ、二人の子、恥ぢ且つ悔いて去り、母の玉緒も、同時に絕えにけりと。あはれ。今日これを聞くだに、袖をぬらすばかりなり。これ、良人に對して貞操を守り、子孫を庭訓する女子の摸範とするに足るなり。要するに、今後不潔なる世の中を淸むるものは、武士道的女子敎育を受けし、女子にあらざれば能はざるべし。正義の人は、黃金の前に腰を屈するを知らず。然るに、今日は、正義地を拂はんとせり。結婚するもの、互に黃金の有無を問ひて、他を言はざるものもあり。亦、自ら名を正義に借りて、不義不正を働くものあり。或は、權謀術數を事として、當時の傑物を誇るものあり。おのれ、これを聞きこれを見るにつけて、慷慨に堪へず。依りて、今後は、專ら、武士道的敎育を施さんとせり。

女子の學問（地理科一）

岸田松一郎

凡そ、何れの業務をなすも、其の性質を知り、其の目的を立てざる時は、力を用ゐる事大なりと雖も、効果を收むること甚だ難かるべし。學業を修むるも、亦猶、斯の如し。能く其の科の性質を知り、又、其の目的を認めざる時は、如何に多くの歲月を費し、如何に多くの力を用ゐると雖も、是

亦、徒爲徒勞たるを免れず。

普通教科の中に於いて、其の趣味甚だ多きが如く、又、甚だ乾燥なるが如きものは、地理科なるべし。能く、其の學ぶべき目的を認め、又、其の性質を知りて、之が知識を收得する時は、乃ち、其の趣味甚だ豊富なりと雖も、苟も、教科課程の義務を荷はしめらるゝが如き心地を以つて、之を學ぶ時は、則ち、極めて、乾燥なるものと化し去るに至るなり。女子が、地理を學びて何の用をかなす、裁縫を學びて日常の要務を達するに如かんや。と説くものなきにあらず、學生諸孃の間に於けるも、亦爾くいふものあり。曰く、地理科は、之を記憶すること甚だ易けれども、また、之を忘却すること速かなり。故に、學校教科の中にありて、試問の責任を負へる間は、問に應じて答へ得べきも、一たび學窓を離るゝ上は、先、わが記憶より逸し去るものは、地理科を以つて、最も甚だしとなすと。事實果して然りとすれば、余輩も、亦、世の或説に左袒して、寧ろ、裁縫手藝の實用を達すべきものと、換ゆるの必要を叫ばんと欲す。然れども、獨り、事實の斯の如くなる故を以つて、未だ俄に、爾云ふ能はざるものあり。事實は、たとへ斯の如くなりと假定するも、果して、之が眞正の事に屬すべき現象なりや否や。を探求せざるべからず。換言すれば、この科の性質を知り、又、此の科を學ぶの目的を認めたる後、何れも、其の正鵠を得たる、結果なるか否かを究めざるべからず。

惟ふに、地理科を修むる狀況は、種々なるべしと雖も、一たび地圖を繙閲せば、先、紙面なる某の部分に眼をそゝぎて、この蜿蜒曲折する細線は、即ち某の大川なり。この部分なる芒刺狀の符標は、即ち某の大山にして、その連續奔進するものは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

某山脈あり。某部面ある波紋の曲進するものは、某の灣なり。この點々として波紋の中に碁布するものは、某島嶼ありと。夫れ此の如く、單純なる符標の諳記を以つて、地圖を閲し、又、地理書を繙讀するに及びては、某州の產物は何々にして、人口は幾許、面積は若干、その境界は何州とし、その都會は幾何、其の名勝は何處など、單に、數量位置所在廣袤等の諳誦を以つてし、敢て、其の他を顧みるに暇あらざるもの、最も普通の狀態あるに似たり。地圖を閲する狀況彼が如くにして、地理書を讀むの狀態斯の如くあるを以つて、修得終局の目的ありと認容するあらば、甚だ迂遠徒爲にして、日常切實ある技藝を、修得するの勝れるに如かず。河海如何に大ありと雖も、吾人の痛痒關せざるものあらしめば、我に於いて何かあらむ。山嶽如何に峩々たるも、吾人の苦樂之に干からざらしめば、我に於いて何かあらむ。山脈如何に連亙するも、人生云爲の以外にあらしめば、吾人に於いて、又豈、何かあらむや。

夫れ、吾人々類の以外にありて、痛痒苦樂之に關せざらば、吾人、豈、之を知るの必要あらむや。然れども、事實全く深厚なる關係を有し、而も、片時之が範圍外に脫出せざるを如何せん。借問す。亞弗利加の沙漠は、茫々數千里、而も、數千年の昔に異ならず。蓋、天然の地味と氣候との二者、人類の繁殖を許さゞるにあらずや。西比利亞の地域、人跡甚だ稀なり。蓋、氣候は、人口の繁殖を許さゞるにあらずや。武藏野の月を詠じたりし東京は、既に百七十餘萬の人口を容れ、猶且、其の狹きを嘆ずるにあらずや。日光の靈地、湘南の佳濱、鐵路一たび通ずるや、其の地の殷賑昔日に倍蓰し、帝國の北端南隅に渉り、東域西陲に至るま

で、苟も鐵路の通ずる所、河海の運輸至便の地、悉く、其の他の繁榮富庶を致さゞるなし。されば、交通の便否、氣候の適否、地味の肥瘠に、直に、人生々活に於ける、至大の影響を與ふる所のものにして、氣候の變化は、山嶽の位置に基因し、地味の良否は、即ち、天然と人力との大連鎖を有すること、又、爭ふべからざるの數なりとす。産物の富饒は、人生の幸福を增進し、地理の便利は、文明を生むの母なることを推知し得べし。指を屈して數へ來らば、地理の影響を蒙りて、文野の軒輊を致し、人物の思想に差異を生ずること、歷々として指すが如し。斯の如く、地理と人類との關係緊密にして、利害の與かる所、確然動かすべからざるものなれば、河海いかに大なるも、山嶽いかに峻峭なるも、吾人々類の關知する所にあらずとなし、交通如何に便なるも、運輸如何に不便なるも、皆是、齒牙に掛くるに足らずと、なす能はざること明かなり。されば、地理を學ぶに當り、旅行の案内者たるの材料を得んが爲にあらず、專門的地理の研究を要するの謂にあらず、地文學者たるの素地を得んにもあらずして、要は唯、地理の大要を知悉し、吾人の住む所の國土は、何によりて支持せらるゝか、他人の住む所の國土は、何故に發達しつゝあるか、人類の努力は、いかに天然を改造し得るに足るか、優勝劣敗は、如何に行はれつゝあるか、人類の健全は、いかに國土の隆盛に關係あるか、衞生攝養の効は、如何に國家に影響するか、商業の發達は、如何に吾人の幸福を增進するか、商業の發達は、如何に德義と關係あるか、工業の發達は、如何に國家の富强に影響あるか。凡そ、是等の事實を蒐集し、又、之を統合して、演繹歸納する時は、即ち、此の科の趣味を眞正

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に味ふことを得て、對岸火災の觀想を消滅し、豁然として、この科の眞正面を開展窺知するを得べし。今や、歳月踆々として、將に終りを告げむとし、屐聲草忙として、細説の時なし。明年更に筆端を改めて、之を詳論し、將に、大に諸孃の反省を請はんとす。

精華

日本女訓（未定稿）

川崎重陽

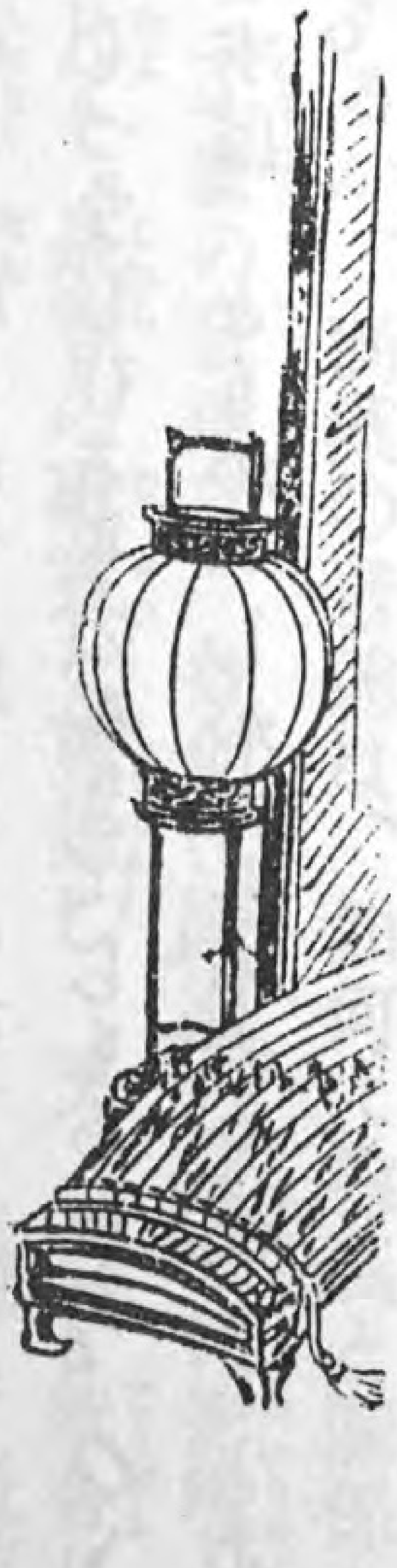
四十五、子女を、他に嫁がしめむには、其の夫となるべき人の性行を詳にし、かつ、我が女ともよくはかりて、輕々しくすべからず。たゞ、資産門地にのみ、心くれて、愛しきわが子を、うれひの淵にしづましむるものなきにしもあらず。つゝしまずば、とりかへしがたき不幸を招くことあらむ。

四十六、主婦、我が子息に嫁をとりあはせて、やがて姑とならば、たゞ、何事にも、心に、へだてなく、嫁をば、年若のものよと、心をそへてひき立て、おのが、年久しくあづかりたる一家の内事を相續せしめて、行末ながく、家運の榮をねがふ心ばへあるべし。おのがうみの子だに、ややもすれば、心に任せぬことの多きがならひなるを、まして、他より嫁ぎ來て、我が家風に、深くも染まぬものゝ、萬につけて、こと〴〵く、已が意にかなふべきにあらず。我が女の他にとつぐを思ひあはせても、嫁をば、深くあはれみはぐゝむべきなり。

さよ女

指原乙子

武藏國江戸深川北川町に、按摩をとりて世をわたれる盲人、春養といふものあり。先のとし、妻、しもといふもの、さよといへる娘をつれて、此の家に來れり。しかるに、此のさよ、父母によくつかへ、父の目しひあるをもて、殊に、いたはりかしづきしが、家貧しければ、ある武家のもとに出でつかへしを、つかふるひま〳〵、手ならひ琴ひく事をまなび、又は、文よむ事をこのみ、わづかなる給金のあまりにて、四書孝經をもとめ、よみならひしに、目しひたるものを、母一人のたすけにては心もとなしとて、暇をとりて家にかへり、父の業のみにては、世をわたりがたければ、あたり近き女子に、手ならふわざ、或は、このむものあれば、琴をもならはせ、文よむ事も教へ、女の道のあらましをもさとしきかせければ、おのづから、女のわらはの行ひもよく、親々の心もやすまりぬ。つねに、物見遊山などに出ることなく、一家三人、むつまじく暮しけり。さよ、年比にもなりしかば、夫をもちてよと、二親のすゝめきこえしが、もし、父母の養ひおろそかにもあらんと思へるにや。とかくいひのきて、たゞひとへに、親を養ふ事をのみつとめとせり。寛政三年三月に、銀をたまはりて、其の孝を賞し給ふ。町奉行小田切土佐守、是をうけたまはれりとぞ。



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家政

咽喉の養生

ドクトル 山上兼輔

先般來、話せし所の耳や鼻に就いては、醫者も、非醫者も、其の稱へ同じければ、混雜することなけれども、今日、話さんとする所の咽喉と云ふのは、非醫者は、一口に「ノド」と稱ふれども、醫者の方では、鼻咽腔、咽頭、喉頭の、三つを併せて云ふが故に、其の心して聞取られんことを望む。

抑、咽喉の關係は、其の下と前の方は、鼻の後の孔と口腔に連り、下と後の方は、氣管と食道に接し、口腔の內面を被へると、同じ薄き粘膜にて被はる。

而して、咽喉は、世人の熟知せる如く、聲音を發す機關にして、之を樂器中の吹笛に較ぶれば、喉頭內の聲帶は、所謂振動部にして、發音裝置中、最も、主要の部分に屬せり。故に、咽喉、疾病に罹るときは、忽ち發聲を妨げ、日常の談話にも差支へ、動もすれば、累を隣接器官に及ぼし、或は、鼻聲となり、或は、耳鳴、重聽となり、或は、呼吸困難となる等、種々の障碍を起し、一時の不自由を感ずるのみならず、遂には、飲食の嚥下も困難となり、身體の衰弱頓に加はり、生命をも短縮することと少からず、故に、吾人は、居常衛生を守り、爲し得る限り、之を未發に防ぐを要す。而して、若し咽喉の部病に罹りたりと思ふときは、速に、醫治を受け、輕きものは、重きに至らしめず、急性のものは慢性に陷らしめざるべし。故に、世人豫め、咽喉の養生に就き、其の一斑を知り居

るは必要にして、無益にあらずと信ず。是れ今日、咽喉に就き話さんと欲する所以なり。

虚弱家は、氣候の變換、寒暖の急變に遭ふときは、動もすれば、喉頭の急性加答兒に罹り、即ち、喉頭に痛みを覺ゆるとか、聲音の嘶嗄するとか、云ふ如き容態を發するものなり。其の理由を尋ぬるに、何にも六ヶ敷ことにはあらず。即ち、人々、其の身體の生活機能の然らしむるものにして、身體一部の皮膚、寒冷となるときは、其の部にある血管に、攣縮を來たすが故に、其の反動として、他の部分、殊に鼻咽腔、及び、喉頭の粘膜に分布せる血管に擴張を來たし、加答兒を發するなり。故に、皮膚が寒冷に遭ふとき、充分之に抵抗し得る如く、居常、皮膚をして強壯ならしむるは、即ち、咽喉加答兒の素因を去り得るの理なり。

凡て、聲音を發するは、聲帶及び肺臟の運動に因るものにして、常に、音讀又は唱歌等にて、絶えず適宜なる發聲の練習を爲すは、聲帶の發育や、胸廓の容積を增加し、極めて良きことなり。然れども、肺結核を患ふる者、又は、心臟に疾病ある者は、是等の練習は危險なりとす。又職業上避難き唱歌師、學校敎員の如きは、一定の休憩時間を設くるを必要なりとす。若し、斯る呼氣の努力を要する業務に從事する者にして、休憩せざるときは、肺に鬱血を來たし、咯血又は、氣腫を發する虞あり。而して、唱歌師、演說家には、聲帶の痙攣、或は、痲痺を來たすことあり。又、聲音は、微細の刺戟にも感動するが故に、寒冒、精神感動、房事過度、消化機障碍、酒類、煙草等も、共に聲音に變化を來たすものにして、聲音嘶嗄し、音調を自在に發する能はざるものは、多くは、喉頭慢性加答兒の結果なりとす。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

咽喉病の豫防法は、先第一に、喉頭の疾患を誘起する所の寒冒、過度の冷熱、淫濕、乾燥、塵埃の如き刺戟、粉末、及び瓦斯の吸入、聲音の過勞等を避け、酒類煙草の濫用を愼むべし。殊に、聲音を過度に勞する講釋師、音樂家等の如きは、一定時の外は、發音を愼み、且つ、飲酒喫煙を禁ぜざるべからず。而して、體質虚弱なるもの、殊に小兒に於いて、咽喉の疾患に罹り易きは、多くは、先天性又は後天性に、皮膚の薄弱なるに起因するが故に、皮膚をして、健全ならしむることを努めざるべからず。因りて、小兒に於いては、適當なる衣服、殊に「フラネル」の襯衣、足袋、頭巾を纏ひて、毎常、皮膚を平時に保護し、外氣の劇襲を避け、新鮮の空氣中に呼吸せしめ、室内の換氣に注意すべし、大人に於いては、之に加ふるに、毎日、皮膚を冷水布にて摩擦するか、或は、全身に冷水を灌漑したる後、皮膚の赤色を呈するまで摩擦するは、大に効ありとす。其の他、高山又は海濱に遊ばしむるも、亦、良しとす。

鼻腔内に疾患あるが爲めに、口にて呼吸を爲すときは、寒冷若くは乾燥せる不潔の空氣、直に、咽喉を襲ひ、亦、其の部に疾を生ずるが故に、鼻に疾あるときは、速に、醫治を請ひて、其の原因とある可き、鼻病を除かざるべからず。

傳染性の咽喉病は、之を隔離せば可なりと雖も、結核、梅毒の如きは、其の人、既に、他の部、該病に罹り、之が續發症として、咽喉に來るは、豫防し能はざるものとす。

職業上、高き熱度の室内、或は、塵埃多き工場、又は、有害瓦斯中に於いて業務に從事する者の、咽喉病豫防に就いては、遺憾ながら、今日、我國諸工場の程度にては、如何ともする能はず。他日、

工業衛生の完備するを待つの外なかるべし。

聲音の節用、　雜談の禁制は、一旦、喉頭の病に罹れるもの丶治療上、至大の關係を有するものあり。何となれば、其の病者發聲するときは、喉頭粘膜面の相摩擦すると同時に、喉頭筋も亦働くが故に、其の部に充血を催し、病勢をして、增惡せしむるの誘引となればなり。頑固なる喉頭疾患が、聲音の節用のみに因りて、輕快に赴くの例尠からず。右に述ぶるが如く、聲音の節用は、治療の一端なれば、喉頭病者は、其の職業如何に拘はらず、聲音を節用し得べき、閑散の地に遊ぶを要す。

又、氣候療養に就いて云へば、人家稠密なる都府に居住する人士は、夏期は、空氣清涼にして、酸素に富む山林地、冬期は、温暖にして、空氣中に鹽分を含む海濱に轉地するを、最も良しとす。

食物は、温度に注意し、過冷過熱のものは之を戒め、常に、冷熱中庸を得せしむ可く、酒類は、嚥下の際、咽頭粘膜を直接に刺戟するのみならず、血中に吸收されし「アルコール」分、復た、呼氣と共に氣道を經て、喉頭を刺戟するが故に、喉頭を病める人、若くは、喉頭病に罹り易き素因を有する人は、全く、之を禁止若くは節減せざる可らず、烟草も、亦、喉頭粘膜を刺戟するものあるが故に、喉頭病には、概して害あり。殊に、急性の加答兒あるときは、嚴に、之を禁ぜざる可らず。但し、慢性の疾患にして、習慣上、抑制し能はざるものに在りては、緩性のものを撰み、纔に之を用ゐるは、大害なかる可し。

平素咽喉に、少しにても障碍のある人は、毎朝、食鹽水を以つて、含嗽するを良しとす。

尙終りに臨みて、世間の父母たる人に、忠告すべき一事あり。それは、平生、各自の小兒に敎ふるに、

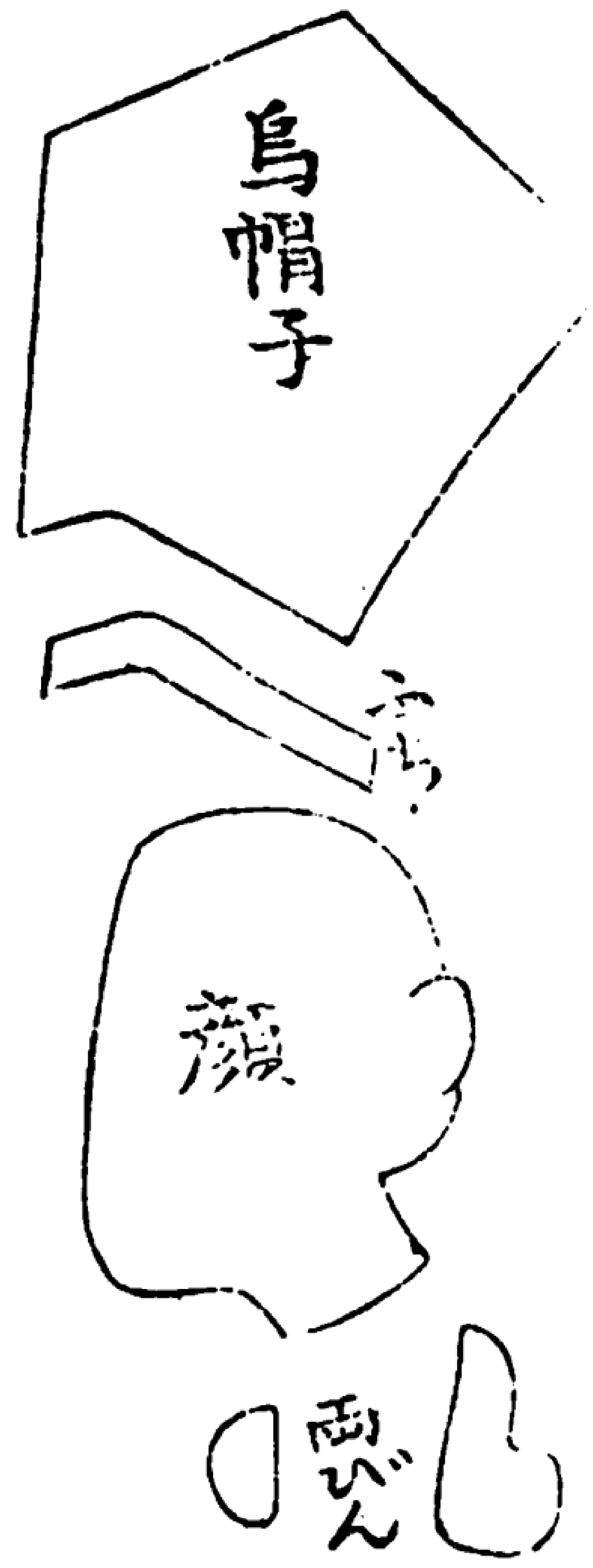
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

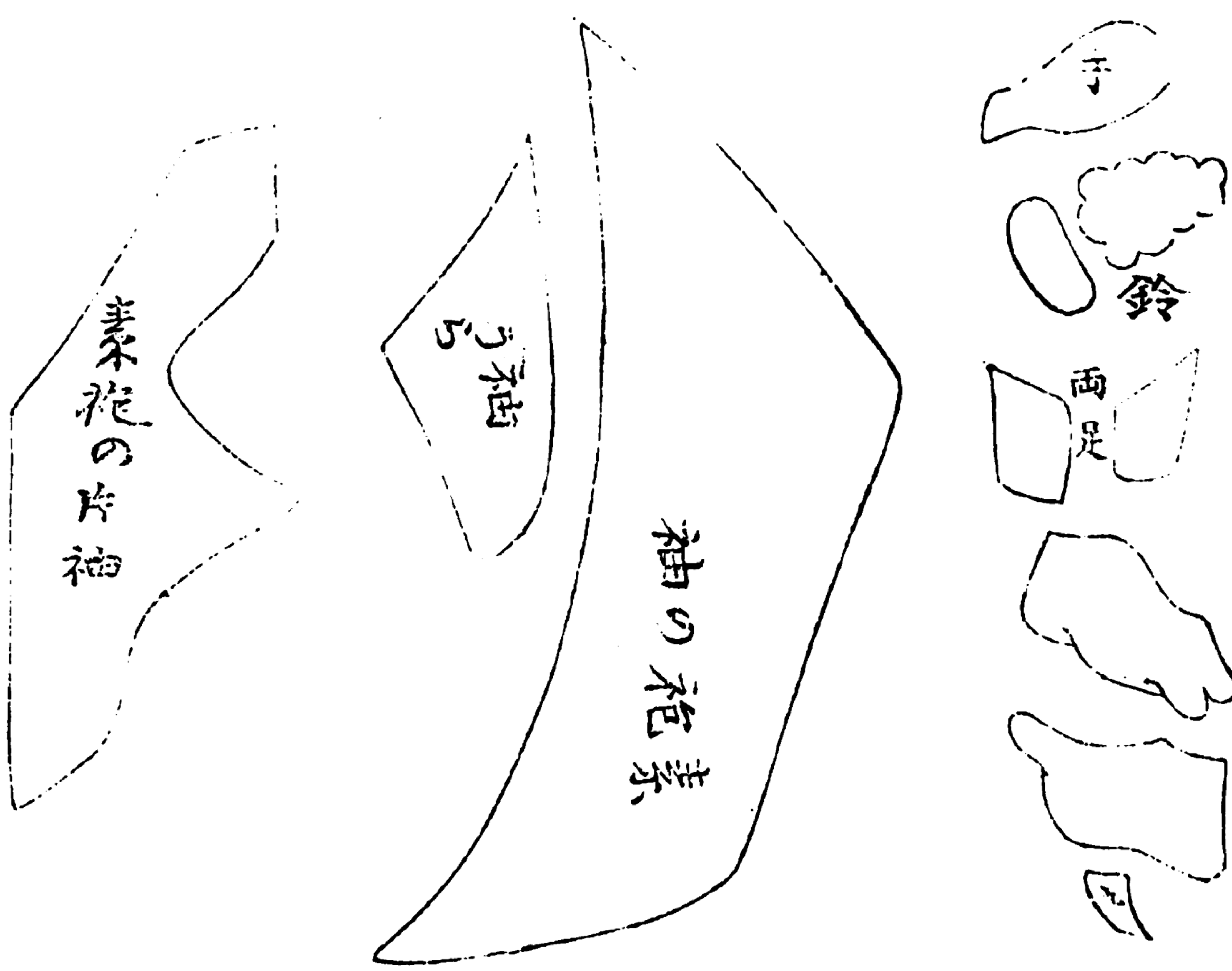
口を開き、他人をして、咽喉を窺はしむるの習慣を附するに在り。否らざれば、小兒、咽喉病に罹りしとき、口を開かずして、其の現況を診視すること能はざればなり。

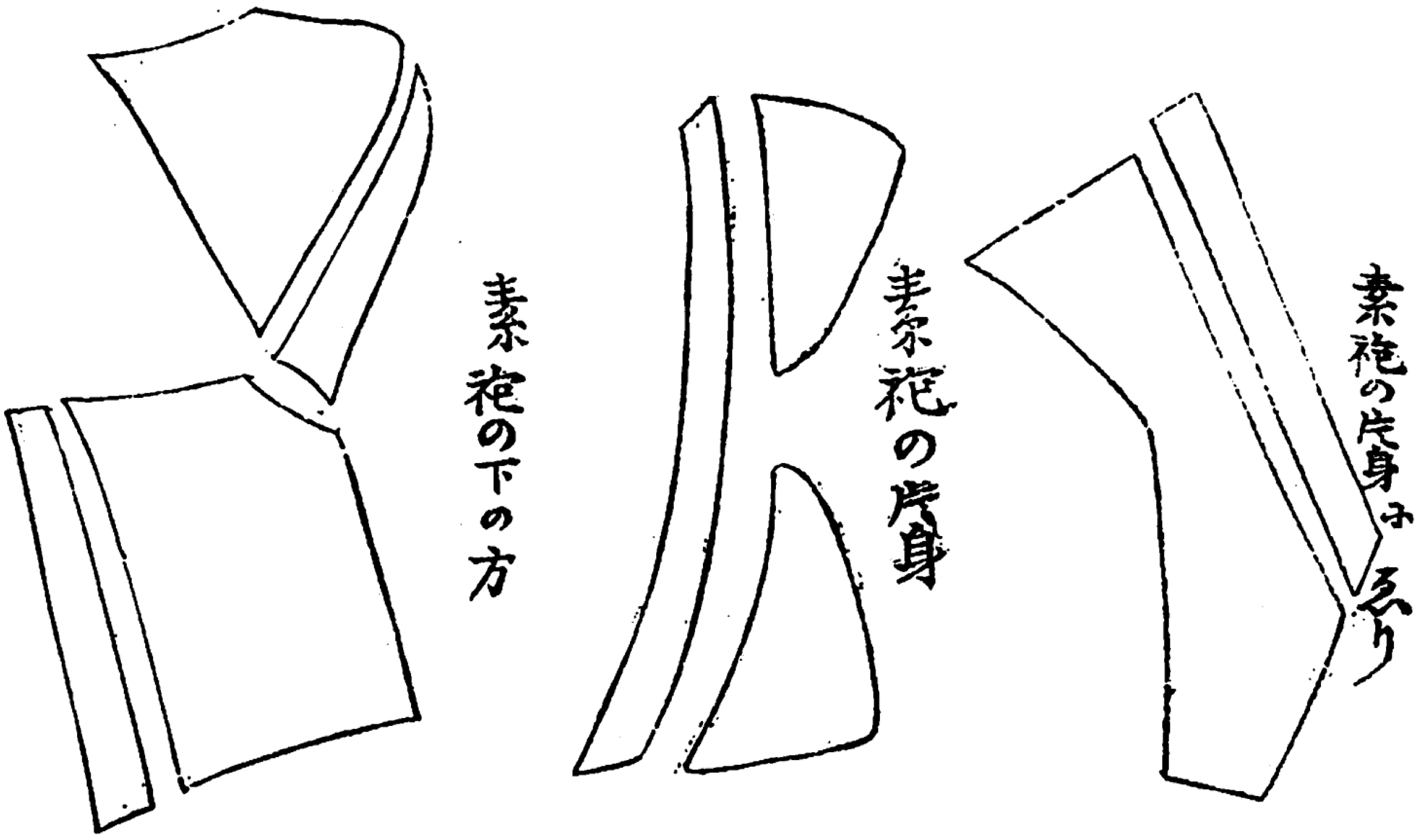
たちぬひ

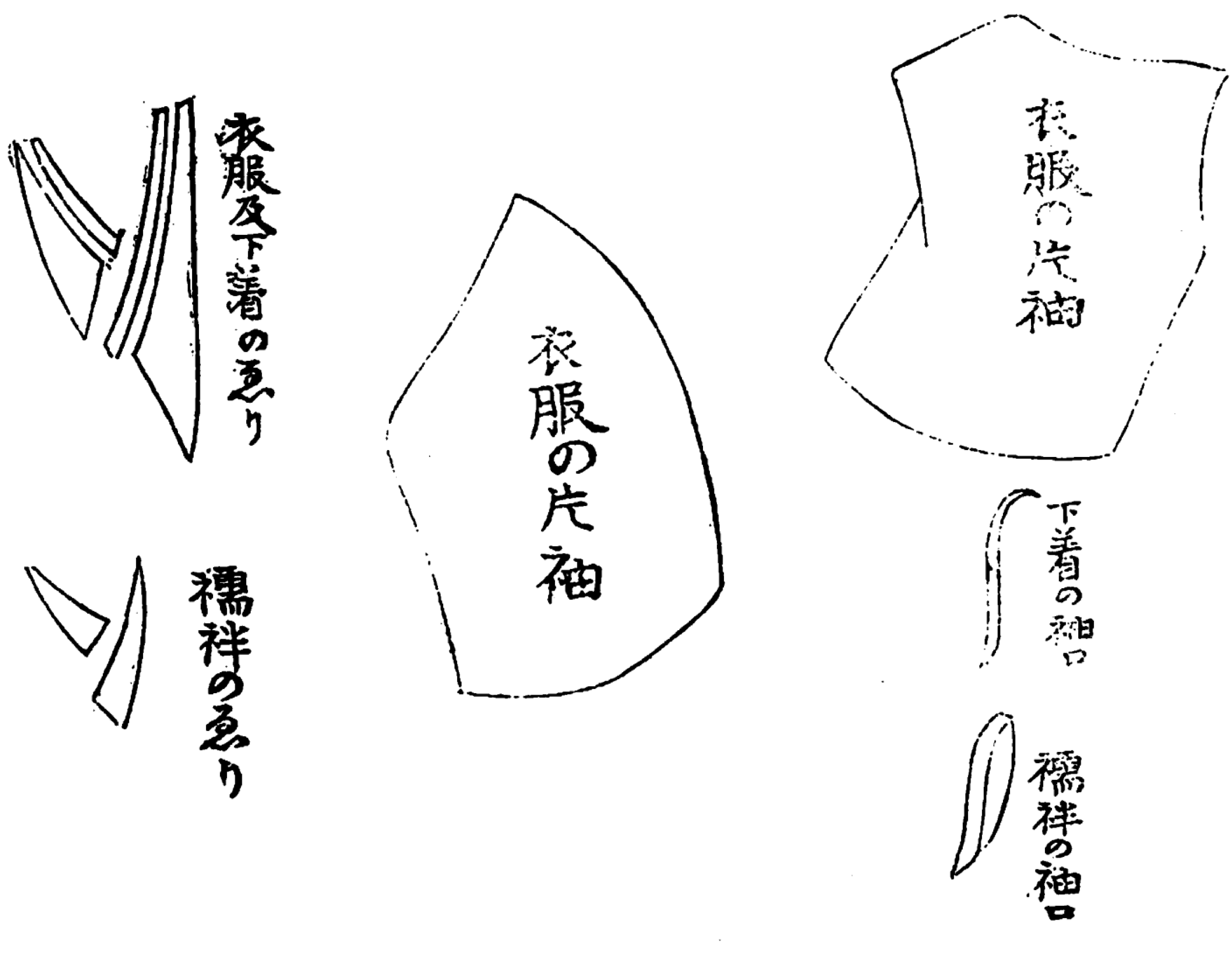
西山たい子

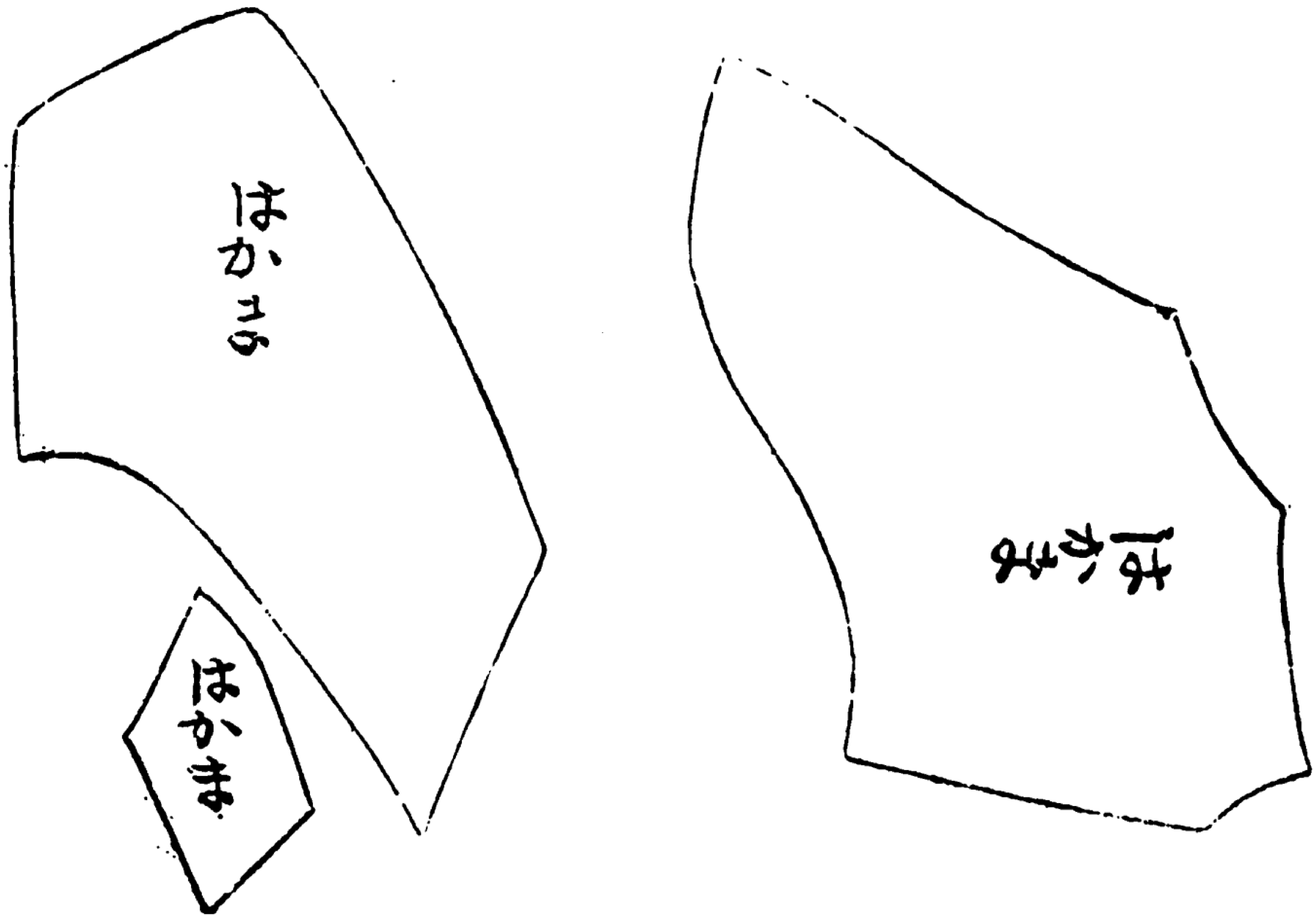
三番叟

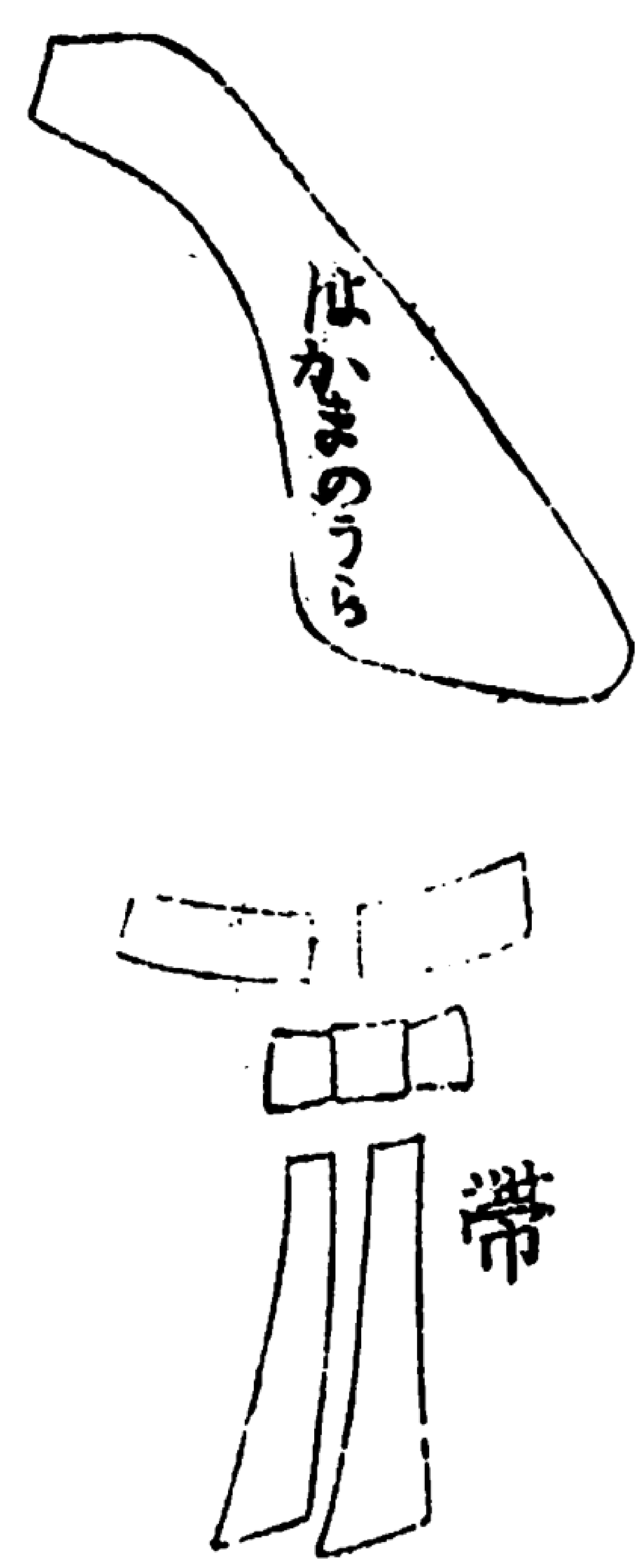




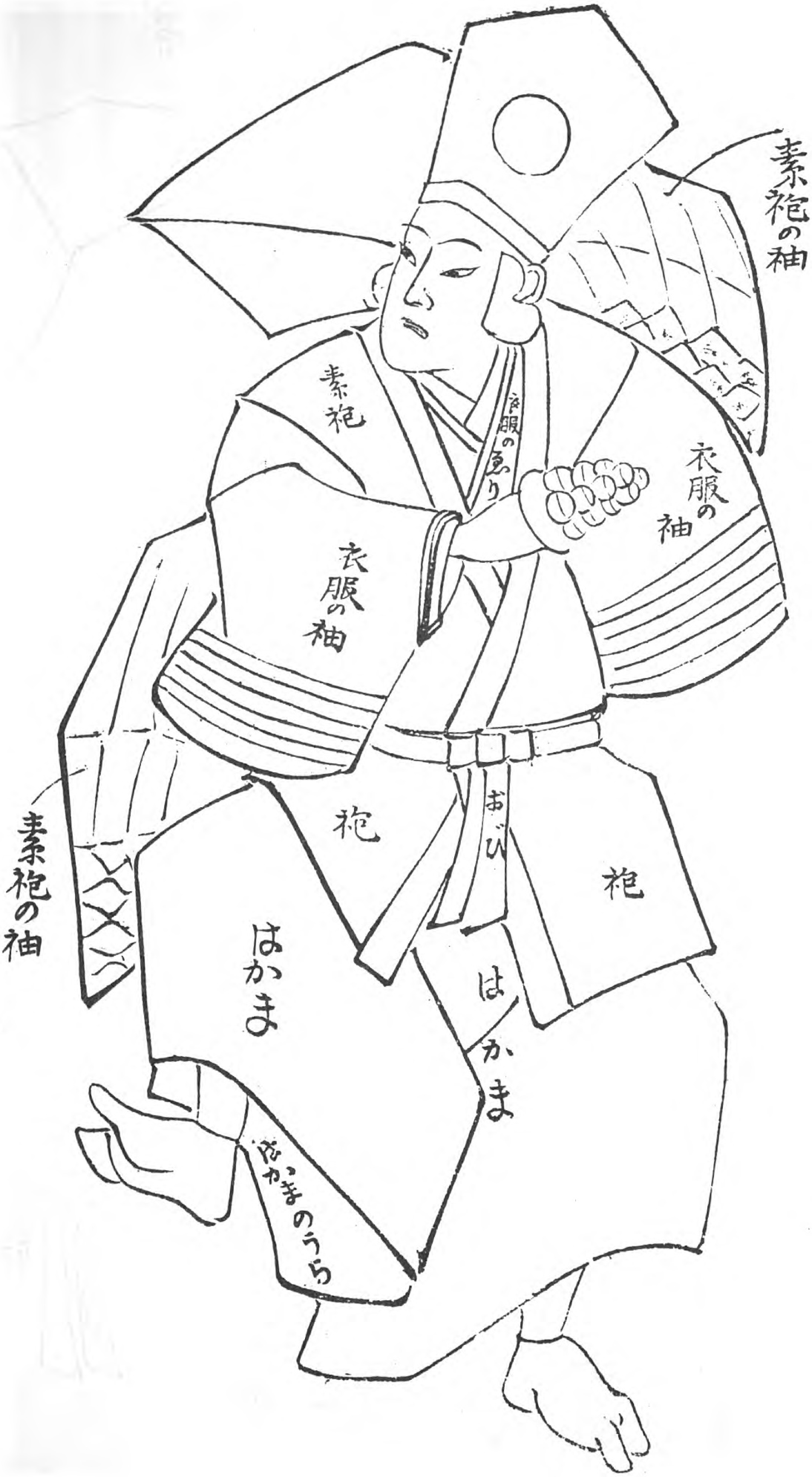

素袍の片身にゑり
素袍の片身
素袍の下の方


衣服の片袖
衣服の片袖
衣服及下着のゑり
下着の袖口
襦袢のゑり
襦袢の袖口





厚紙を右の如き形に切り、袖うら、袴うら、帯、袖口、下衣のえり、鈴、手等をぬきて、あとは、綿をよきほどに入れ、顔を畫がき、また、素袍の袖をも畫がき、左の如く組み合すべし、但、衣服をのしめにせんには、左の圖の袖のすぢめに、白き切を、細くはりつくべし。衣服は、素袍を青きしゆす、袖をひぢりめん、袴を錦、帯を白羽二重、等にすべし。ゑぼしは黒くぬり、ふちは白くして、烏帽子の眞中に、日の丸をつくべし。左の圖を見て、推量りたまふべし。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だいどころ

鳥のこくせうのしかた

味噌をよくすり水にてのべ、酒を三分まぜ、鳥を細にたゝき、入れ、よくまぜて、右の鳥と、味噌と等分か、但し、みそをかたきほどにして、鍋にいれ、炭火にて煎べし。又、山椒をいれてよし。もつとも、何にても、庖丁人の見合にすべし。但し、煎立たる内に、箸にて、かきまはして出すべし。

鳥鱠のしかた

雁か鴨かを料理して、肉を二ッ三ッかに切りへぎ、脂皮をさり、又、はそくつくり、熱酒にて、一度ねり、酒をすて、酢は、鳥のどうかうをいれてせんじ、すこし冷し、右の鳥に、このさましたる酢をかけあひてよし。尤も、花かつを、いるべし。又、外に魚をすこしいるべし。わさびをいれてもよろし。

鷹野の寸々切鳥のしかた

雁か鴨かの、肉も骨も、能くこまかにたゝきて、又、たまりし血を、そのまゝに、右の骨、肉にかけ、よくまぜて、腸も、毛、丸にいれ、鳥五合に鹽二合五勺いれ、手にてよくもみ合せ、壺にいれ、十日ほどすぎて、取出し、かうぢをいる。右の血をいるれば、麹七合いれ、右かうぢのはなをよくもみおとし、かうぢの糟をこげ色に、炒臼にてひき、右の花とひとつにして、右の鳥の中へよくまぜて、古酒をいれ、またたゝき、醬油のしるさくらゐにして、また壺にいれ、風のいらざる様にして、口を閉ぢ、八日ほどすぎて宜し。また、小鳥も同じことなり。右、雁鴨の新しきを料理すると

きは、胴からがよし。これは、鷹狩に御出の時に、みな〳〵、つぎ〳〵の人のなされしことあり。

鳥醬のしかた

鶁か、鶉か、雲雀か、右五十を粕に鹽をあはせ、これは、喰加減にして、よくまぜて、廿日ほどつけおき、餅米、白米五合かけ色に、炒して粉にし、麹三合、前段のごとくにして、蒜、黄蓮、陳皮、かけ目壹匁づゝいれ、これを前段のごとく、右鳥を粕より取出し、よく紙にてふき、またたゝきて、古酒をいれ、見合によりて、又、十日ほど壺にいれて、いだすべし。酒のさかな、手取ざかなによろし。

鳥の法論味噌のしかた

寒の中に、雉か、雀か、鴫かをほそくつくりて、骨はよくたゝきて、白味噌をよくすり、酒と水にてゆるくのばし、右鳥と味噌とを等分にあはせ、鍋にいれ、炭火にて、ゆるくそろ〳〵と、かきまはし煎べし。わり山椒、黒胡麻の實、くるみをいれて、二時か三時ほど、そろ〳〵と、ごけぬやうに煎べし。其の後、ぼろ〳〵となり、大かた、汁氣なきやうになる時に、取上てよくさまし、壺へいれおけば、翌年までも風味損ねず、よく持べし。にんじんをいれ、赤味噌いれたるは、一入よろしきものなり。魂氣のくすり、一、腎藥、一、ひへ性の人には、取分け藥あるべし。

雉の山かけ汁のしかた

雉子をいかやうにもきり、酒をひた〳〵いれ、火をほそくして、右酒くさくなきやうに煎るべし。また、その上へ、水をいれ、煎りたし、鹽すこしいれ、右汁かるきときに、醬油すこしいれて、右だしいらず。また、腸をえりだして、仕立柚の酢をかけるもよし。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義(二十五)

殿も、うへも、あなたにわたらせ給うて、月ごろ、みずほう、どきやうにさふらひ、昨日、けふ、めしにて、まゐりつどひつるそうの、ふせ給ひ、くすし、おんやうしなど、みち〳〵のしるしあらはれたる、ろく給はせ、うちには、御ゆ殿のざしきなど、かねて、まうけさせ給ふべし。

釋義

○殿、道長公なり。

○うへ、道長公の室、倫子をさす。

○あなたにわたらせ給ふ、常の間の方へ歸らせ給ふ、との意。

○月ごろ、月頃にて、此の程中、いく月も、との意なり。源氏物語、葵の巻に、御よそひも、つきごろは、いとゞ、なみだにきりふたがりて、など見ゆ。

○みずほう、御修法なり。

○どきやう、讀經なり。

○めしにて參りつどひつる、道長公の御召に依りて、參集したるの意。

○ふせ、布施とは、法師にあたふる、物品の總稱。

○くすし、醫師なり。

○おんやうし、陰陽師は、もと中務省の被官なる陰陽寮の職員にて、卜占、家相などを、考ふる事をつかさどる者なるが、こゝは、祈禱ま

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たは、祓のことなどをする者をいふ。
○みち〳〵のしるし、修法、醫術、陰陽師など、いづれも、その道々の効驗ありたる事をいへり。
○ろく　祿にて、つかさ人などにたまふ物品の總名なり。竹取物語に、ちからをつくしたること、すくなからず、しかるに、ろく、いまだ、たまはらず、など見ゆ。
○うちには、一方にはの意。
○御ゆ殿、生兒に湯をつかはす式儀なり。その式は、つぎ〳〵に見えたる次第に依つて、そのおほかたを知るべし。

譯解

道長公も、道長公の北の方も、おほかたなる、常の御座敷の方に、御歸りあそばして、このおひだちういく月も、御加持などの御修法や、讀經などに伺候したる僧や、または、昨日、今日、御召に依りて、御殿に參り集りたる僧の布施物をあたへたまひ、また、中宮に御くすりをさしあげたる醫師や、また、御祈禱をしたる陰陽師など、その道〳〵の効驗あらはれたるものどもに、種々の物品をたまひ、又一方には、皇子に御湯を浴せたてまつるべき、御湯殿の儀式など、前もつて、用意せさせ給ふなるべし。

家計簿記法講義（承前）

磯部　武者五郎

本號の諸表は、二百四十二號に掲げたる表の前に入るべきものなり。

編輯者

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

34年 月	日	摘要	拂 圓	拂 十錢厘
10	9	現金簞笥壹棹買入	15	000
		決算高	15	000

34 年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	15	現金下女二人十月分	5	000
		決算高	5	000

34年		要 摘	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	22	現金兩親へ	10	000
	6	同上長男へ	1	000
	20	同上良人へ	20	000
	20	同上自分	5	000
		決 算 高	36	000

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

34年 月	日	摘　要	拂 圓	十錢厘
10	7	現金某々氏來る西洋料理	2	100
	12	同上某氏婚禮に付祝として鰹節壹函を贈る	5	000
	18	同上某氏不幸に付香奠	1	000
	22	同上來客に付菓子鮨買求	1	000
	11	同上來客用煙草	1	000
		決算高	10	100

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

34年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	14	現金大工三人及材木代金	6	000
	14	同上植木屋拂	2	000
	27	同上据風呂直し	4	000
		決算高	12	000

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

34年		摘　要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	9	現金電話何月より何月迄	9	000
		決　算　高	9	000

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

34年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	4	現金所得税附加共	20	000
		決算高	20	000

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

和畫通信講義（第二十回）

山崎彩峨

南天、こを墨にて畫かむには、第一第二第三の葉は、淡墨を含めし筆先に、濃墨を十分に附して、これを畫く。四五六の葉は、淡墨に浸し筆先に、濃墨を少しく附し、他の稚葉は、淡墨のみにて、畫く。莖幹は、挾墨にて畫き、果實は、淡墨なれども、また、その淡墨の中に、濃淡を製して、畫き、乾きてのち、濃墨にて、果實の點と葉脈とは、入るゝなり。

顔料の折は、第一第二第三の葉は、藍黄等分の青色を含めし筆先に、藍か、または墨かを附してゑがき、四五六の葉は、黄がちの青色を含めし筆先に、通常の青色を附し、他の稚葉は、黄がちの青色に、代赭と臙脂とを混和したるものにてゑがく。莖幹は、この代赭を和したる青色に、臙脂を挾墨となして、ゑがく。果實は、熟せるものは、朱と臙脂とを和し、次は、雌黄を含めし筆先に、朱を附し、次は、黄がちの青色を含めたる筆に、朱を附して、ゑがく。かくて、乾きたるのち、果實の點は、朱と臙脂とを和したる鮮紅色にてのち、葉脈は、藍か藍墨かにて入るゝなり。

葉脈



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文林

月前時雨　東久世通禧

行きめくるひとむら雲のうすけれは
つきにさはらて降りしきるかな

寒夜衾　高崎正風

厚ふすま打かつきてもおもふかな
みつにわれたるさとの夜寒を

冬川　鍋島直大

いさゝ川かれたるみつの音さくも
そゝろに寒くありにけるかな

社頭冬月　津輕承昭

白ひけのやしろのもりに風さえて

てるかけさむし冬のよのつき

池水鳥　大谷光尊

わか宿の池のあしまにところえて
遊ふみつとりむつましきかな

翠松　水野忠敬

年へぬるほともしられておかの松
みとりは深くみえわたるかな

山家落葉　宮地巖夫

谷かけに木葉つもれるやねみえて
こすゑまはらにありける哉

寒汀鷺立　岡部譲

かれあしは皆をれをして鷺はかり
何をみきはにひとりたつらむ

時雨廻山　北郷久政

山の端にやとり定めぬうきくもは
いつくをめくる時雨なるらん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

社頭杉　坂　正臣

みつ垣のひさしきよゝり祝ひきて
根さへにたかし森のほこすぎ

山路落葉　鎌田正夫

もみち葉のちりて流るゝたに川の
岩根つたひにゆくやまちかな

歳暮　下田春興

いくつねて春そといふも指折らて
知らるゝはかりなりにけるかな

初霜　蜂須賀随子

わけはてゝそらにきえゆく月影を
芝生にのこすけさのはつしも

野初冬　鍋島榮子

すゝきより外には残るくさもなく
見渡しひろく野はなりにけり

竹霰　前田朗子

朝づく日さすかけ消てさわかしく
あられふるなりまとの竹むら

夜落葉　南郷柳子

月をのみ枝にのこしてよあらしの
わたらもみちを散しけるかな

夜木枯　岩崎寧子

木からしのこの葉拂ひて淋しくも
なれるこすゑに月そかゝれる

漁村時雨　小池道子

舟出せんあまかこゝろも迷ふらん
時雨のくものかゝるなきさに

冬山里　松平健子

山さとのかきねのみちは霜はしら
かたくつれしてふむ方もなし

野逕霜　北島以登子

あさひかけさすかたみえて置く霜の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けふりそめけり野への細みち

海眺望　中島歌子

立おらふ松の木のまにみるほとは
走るもしるしおきのおはふね

暮天霜　服部磯子

こからしのかせふきたえし大空の
霜くもりしてひはくれんとす

下田春興

おのが家集駒つるぎのはしがきとてよめる長う
たおらびにみぢからうた

こまつるきわきへの庭は、千よろつの草はしけれと、春ことにはおもにほはす、秋ことに實をもむすはす、よしゑやし花はなくとも、よしゑやし實はなくとも、おのかしゝ時をたかへす、春秋に生ひしけらひて、水無月のおつくてる日も、いさゝかもたゆむ色なく、神無月しくれふる日も、いまさかもおやむ事なく、としつきの重なるまにま、ます〱に數もまさりて、雨ふれはおめにおとおひ、かせふけは風になひかひ、ところせき庭にはおれと、かきりおき色こそ見ゆれ、よしやゑし花はなくとも、よしやゑし實はなくとも、こまつるきわきへか庭の、八百萬の草のこと〱めてすやまめや。

駒つるきわきへか庭をわけゆけは
おひたつ草のほとも見えけり



漫録

各國婦人の特色（續）

三石直方

▲他の長は、責て我が短を補ふべし。他の短は、以て反省の料とすべし。
▲たゞ、我長をすてゝ、他の長短をあはせとるの愚をなすべからず。

（其三）支那婦人の結婚

（一）凡そ、男子二十才餘になれば、其の父兄、婦を娶らしむ。何方の處女を貰はんとするには、まづ、兼て、兩家共に、心易き人を頼み説親す。媒人、女の方に來り、主人に面談致したく申入れば、主人外廳に出迎へ、先生勞駕有何見敎、と云ひ、互に寒温をのべ、主人より請座といへば、客、有座と答へ、辭儀をして、椅子にかゝり、令愛を何方の子息の嫁に貰ひたき趣、某を以て作伐せしむといへば、女家の主人承り、不才の小女、箕箒に備ふるにたらず、など答へて、辭退の色あり。媒人押て申入るれば、さらば、父祖伯叔にも相談致し、返答申すべきとて、媒を返すもあり。又、即座に父祖伯叔など列座にて、領承返答するもあり。或は、其の後、主人媒のかたにゆき、返答する事もあり。父祖なきものは、伯叔兄の内より、應對するあり。又兼て、わけて入魂の者なれば、外廳に座するに及ばず。直に、內廳後軒にて、應對す。男女、幼穉の時より聘定といふ又訂姻するも有り。十四五才になりて、說親するもあり。幼穉より聘定すといへども、未ニ曾做ゝ親已前に、いづれか死する事有れば、相互に、定式の喪服を着し、喪を

つとむ。定式の喪期過ぎて、女を再嫁せしめんと思へば、男家へ内談して、男家異議なければ、再嫁せしむ。是を再醮と云ふ。若し、男家より一旦貰ひたる事あれば、是非、贅婿を入て妻すべしといへば、女家異議あるにもあらず。成長の上にて、約束の通り、男家へ遣す。女死する時は、喪期畢つて、其の女の妹あれば、妹を貰ひ、若し、相應の妹なければ、外に縁談す。總て、婚を結ぶに、庶人は、街長に届け、官吏は、長官に届くる事なし。

（二）　媒人は、（人に氷と云又中人と云）親類又は、朋友などの內、兩家共熟懇の者、或は、兩家出入の輕き、阿媽收生婆（一名穩婆）など云ふ樣なる者を賴み、內分申入るゝ歟、或は、何方には、幾歲位の娘あり。此の方の嫁に御貰ひ有ましくやなど、、內々にて、女房などに、阿媽などより云入るゝ事もあり。此の

下媒人にて口入し、扨、親類朋友などの內、表向の媒を賴み、改めて、女の方に貰ひに行もあり。媒人、女の方の返事を承り、男の方に返答する時、男の方にて、酒肴など用意して、饗應する事もあり。又別段に、吉日を撰み、招請する事もあり。女の方も同じ。（緣談とゝのひたる上にて、阿媽などに、謝儀貧富によつて等からず、）

（三）　雙方允諾の上、二三日も經て、吉日を撰み、（天德月德などの吉日也）嫁貰ひの書簡を遣す。此の時に、葉茶を女に方に送る。小さき錫鑵に入れて、數拾鑵、百鑵程の不同あり。送茶といはずして、是を授茶といふ。（茶は、本根を移し植ゑずして、子を生ずと云へり。故に、古の人婚を結ぶに、茶を用ひて禮とする事有りき。かならず此遺ならんか。）

（四）　書翰、並に茶を送るに、奴婢を（奴は下男婢は下女）使として遣す歟、或は、媒を賴み遣すか、媒は、駕籠に乘りて行く事もあり。女の方に來り、有人在應請數と申入るれば、取次の奴僕出で、右の書翰茶を請

取、受取いたしに定りたる式なし。口上の趣を主人に達す。主人書翰を受取、直に返翰を認め、取次の者より、右の使の者に遣す。媒人來れば、主人對面す。

（四）　又、數日過ぎて、吉日を撰み、送盤する送盤とは、結納の送り物の事也。一に迓盒と云ふ。送り物は、端物、珠玉、細工物、笄戎、指笄なり。笄戎笄指を送る事を、上笄といふ。女に始めて笄をさゝする故上笄と云ふ此の時、取結の吉期を撰み、女家に通ず。是を道日といふ。道日とは、俗語にて、日をいふと云事。日取を定め女の方に通ずる也。吉期の日取を、男の方より通じたる時、女の方にさしつかえなければ、直に用意す。若し、故障等あれば、外に吉日を撰みたき由、媒の方に相談す。此の吉日陰陽先道士な頼みてゑらむ事なり。此の時、女、額際の髮を切りて、額には、包頭をつけ、又、竿をさゝしむ。是は、此の方の額直しなるべし。

（五）　此の時、書簡に目錄を添へ、使を以つて、女の方に遣す。又、媒を頼み、遣す事あり。双方より、祝儀として、使の者に銀子を遣す也。書簡は、父の名にて遣す。父なき者は、伯叔兄の名にて遣す。結納受取渡し、定りたる式なし。

（六）　右結納の品、受取の後、四五日も經て、女の方よりも、又贈り物あり。珠玉、緞匹の類、不同あり。反物、珠玉の類、男家より贈りたる品と、模樣なども、同物なきやうに見はからふ。是を回帖といふ。回帖とは返管なり此の時、女の八字を送る。

（七）　双方の贈答すみて、婚禮道具の用意す。女の方に、諸道具の用意出來て、男の方より通じたる、婚禮吉期の三日程前に、粧奩を送る

（八）　粧奩の目錄、男の方に、使の者持ゆき、男の方にて、取次の者受取り、それ〴〵取かた付置き、使の者には、祝儀を遣す。嫁入道具は、釣臺やうなるものにはのせず、道具壹つを、兩人にて中擔ひにして、人數多く、持運ぶを面目とす。

（九）　做親の日は、七ツ時分より、媒人、男の方に來り、用意よくは、同道すべしといへば、婿衣服を改め用意して、婿の衣服、常より立派に出立のみにて、極りたる色目などもなし。花轎花轎は、緞子、縮綿などにて、奇麗に飾りたる乗物婿の方にて、用意する也。を整へ、樂人をつれ、樂人は、法師、藝者の類にて、盲人などもあり。常に、樂などして業とす。女の方にゆく。是を親迎と云ふ。此の時、婿はゆかずに、媒人ばかりゆく事もあり。媒人も婿も駕籠にのり、媒人の轎子、先案内し、其の次に婿の轎子、其の跡に花轎をつらせゆく。婿、親迎の時、岳父の廳上の中央に書案を設け、婿の才藝を試みんとて、支房四寶を紙、墨、筆、硯を支房四寶といふ。整へ、雲箋に詩の題を書き置き、或は、文章の題を出し、書を乞ふ事あり。詩文の題は、岳父より出す。又、女、詩文に志ある者は、女より題を出す事あり。

（十）　大戸の家、家口、十四五人以上を大戸といふ。媒両人ありて、男家の媒人は、女家に行かず。女家の媒人は、男家に面談せず。中戸の家以下は、家口、六七人以上を中戸といふ。さるにてもなし。しかれども、始終の花筵には、両家の媒人も來りて、花筵を助く。媒人の妻は來らず。

（十一）　婿の轎子、女家の大門前に至るを見れば、女家の奴僕、婿より祝儀を求めん爲め、門を堅くとざして開かず。此の時、婿の下部より、女家の下部に、祝儀を遣し、門を開き玉へといへば、門をひらき、婿の轎子を、門内に通す。此の祝儀家の貧富によりて、五十円、百日、二百日、等からず。

（十二）　此の夜、婿の方より、女家に三度の書翰を遣す。初度は、迎に、轎子を遣すといふ書翰、二度目は、支度ありたしといふ書翰、三度目は、合巹の迎を遣すと、いふ書翰なり。女の家、半町程も前にて、媒人の懐中より、初度の書翰を出し、拝匣に入れ、使の者に持たせつかはせば、女家こころ得て、主人、門前迄迎ひに出る。

（十三）　女家の少し手前にて、媒人も、婿も轎

子より下りて、門前に至れば、主人出むかへ、廳堂に（一に外廳と云ふ。）案内して、請上坐と云ひて、手を拱きて、挨拶は、媒人も、今日恭喜と會釋す。主人より、且請坐と云へば、媒人手を拱きて、得罪といひて、椅子に坐す。婿は、始終媒人の跡に引添ひて、諸事、媒人の指圖に任す。

（十四）　花轎は、新娘の内房口に入置く。（内房は、女の居間也。）

（十五）　樂人は、一間に扣へさせおく。

（十六）　主人、自ら茶を取りて　媒人に進め、今晩多勢且請拜茶と、挨拶すれば、媒人椅子を立ちて、茶椀を手に受取り、得罪多謝と會釋して、元の如く、椅子に坐し、茶を吞み、親類朋友など、相伴の面々出で、媒人にむかひ、今晩勞獨種勢玉成請阿と、挨拶すれば、媒人立ちて、又、おなじく、請阿恭喜々々といふて、互に手を拱きて、逸

逸挨拶すみて、元の如く、媒人は椅子に坐し、主人は内に入る。相伴の親戚朋友なども、椅子に坐す。其のとき、奴僕茶を持出て、逸々に氣を進む。茶畢りて、桂圓湯、蓮豆湯、あるひは、杏酪鷄豆湯の類、（いづれも砂糖煮也）一種、又は二種出す。畢りて、奴僕卓子を、先づ、媒人の前に据ゑおき、其の次に、おひ／＼卓子を持ち出で、主人出で、請々とあいさつして、夫々着座し、酒瓶をもち出で、媒人の前の酒鍾に酒を掛ぐ。媒人立ちて、得罪と挨拶して、酒鍾をいたゞき、卓子のうへにおく。主人、また相伴の面々にも、酒を掛ぐ。相伴のめん／＼も戴き、媒人にむかつて、請々と挨拶すれば、媒人猪口を取りてのむ。相伴の面々も、一同にのむ。其のとき、主人上菜といへば、僕、菜を持出で、卓子の上におく。主人請菜といふ。媒人立ちて多謝といふ。相伴人、箸をもつて、菜のよろしき所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を引わけて、媒人に、請々といふてすゝむ。媒人、相伴人に請先々と云ひて、辭讓して、先、一箸吃すれば、皆々箸をおろし、一箸づゝ吃し、酒をのむ。（酒宴の式、賓客の式にあり。）さて、座中にては、目出度事を云ひて、諱避のことばあり。大抵、水酒寡酒などの類をいはず。一雙を成隻といひ、收席を成席といふの類。すべて、單數をきらひ、隻數をもちゆ。

女子要書解題（女、志、之部）

三浦千畝

明良婦人心得草（繪入） 一巻

著者 詳かならず。安永二年、大阪にて刊行す。

此の書、卷首に、鷄之辨、鴉之辯、鳩之辯などいふ教訓的雜説を掲げ、女子の傳記、敎訓の古歌など次々に載せたり。上頭には、女工具を圖して、その解を略記す。俗書ながら、やゝ興味ある書なり。

乳母の草紙 一巻

著者詳かならず。記事の性質、文章の體裁、やや、阿佛尼の乳母の文と相似たれど、二書、自ら別あるべし。時代ば、文中に、『近き頃は、千載集の歌えらびもちひ候、新古今なども、能々御覽じ候て、云々。』など見えたれば、いづれ、鎌倉時代の作なることしるかり。

此の書は、その書名の如く、乳母ある人より、己が乳育せし女子に、書き贈られし書なるべし。さて、著者の身分に付きては、今、詳かに知るによしなきも、その乳育せし女子に對して、『御果報いみじくて、御さいはいありて、女御后の御位に立ち給ひ候はゝ云々。』といへるを見れば、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

當時、然るべき人の乳母たりしこと、云ふも更なり。今、これを乳母の文に比べ看るに、用意文章共に優るとも劣らず。實にこの二書の如きは、我が女訓書中の雙璧と云ふべし。(群書類從四百七十七雜部)

上﨟名事　一卷

著者は、伊勢守貞陸なるべし。此の書の中に、金仙寺さたにて云々。といふ文あり。金仙寺とは、貞陸の父、貞宗の法名也。貞陸の事は、簾中舊記の解題に記せり。

此の書、題號は『大上﨟御名之事』とありて、足利八代將軍義政の時の、女房の呼名の事を旨と記し、猶は、女房の心得べき事がら數條を交へ記せり。最後に、所謂女房言葉なるもの、數十言擧げたり。女房ことばは、女重寶記などを始め、後世の書にも多く掲げたれど、その古く、ものに見えたるは、此の書を以て第一とすべし。(群書類從四百十四武家部)

神國女訓抄(繪入)　一卷

著者は、山口貫道といひ、日向守と稱し、攝州東成郡上宮の神主なり。此の書の卷末に附したる目錄によれば、此の書の後編を始め、中臣祓舊傳、天書紀纂註、神武紀解、古語拾遺注、和論語評註、南遊記(詩集)等、數部の著書あり。想ふに、著者は、垂加の流を汲める神道家などにもあるべきか。

此の書、僅、十數葉の小冊子に過ぎず。且、所論附會に渉るふしさへ見ゆれど、神道の上より女訓を述べ、佛教を排擊したるは、やゝめづらしき心地す。自序に左の如く云へり。

上略、神道は、女人を親み、釋氏は、五障を說く。是全く、水土の變異にして、敎化の差

別只天壤のみあらず。能々辨ぜずんば有べからず。頃日、一二の女子の需に應じて、その大略を記して、神國女訓抄と號け侍る。其言拙しといへども、高にのぼり遠に行一助ならん歟。明和三年酉冬至。

按ずるに、享保十五年刊行の書に、女訓抄といふがあり。これは、僧侶などの手に成りしものと見えて、所說、皆佛教に原けり。此の書、恐くはこの女訓抄を看て、その佛說に、反對して書けるものなるべし。

詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

小山田高家

小山田や青かる麥をかりそめの
情にさへも身をそ捨てける

假そめといふ詞を、いかに心得て詠めるにや。高家、軍令に背きてつみあはるべきを、助けられし大恩義によりて、義貞を救ひ、討死したるなり。豈、かりそめの事ならめや。この作者、いひかけを第一の巧とする癖にて、事實の輕重をも省ぬものあるべし。詠史百首など、名のみことぐしくて、其の見解かくあやまる。四句、例のさへたがへり。

生田野の露と消えしは青麥の
その一ふしやいのちありけむ

新田義興

おもひきや矢口のわたし舟人か
たはかりことにのらむものとは

舟人がといへるはいかゞ。こゝは、舟人の、といふべきなり。

上杉謙信

春日山おろす嵐に甲斐か嶺の
　雪もたまらすなたれけるかな

春日山は、上杉氏の城山にて、小高き山あり。さて、信濃の一國をへだてゝあるを、其の山のおろし烈しきまゝに、甲斐が嶺の雪もたまらずと、いふ詞叶ひがたし。

武田信玄

弓矢には世にたけたりし家の風
　この世に絶えむものとやは見し

二句にも四句にも、世文字ありてうるさし。さて、前に、奈須與市をよめるに、弓矢には世にたけたりし家の風扇よりこそ吹きはしめけれ。と見えたり。この作者、例の癖にて、武田を、世にたけたりといひたるならむ。そは、弓矢とりて、世にすぐれたりとの意なるべけれど、たけたるとすぐれたるとは、意味ことなり。四句、この世にたえむといへるも、をさなし。結句、ものとやは見し。とあるも、いかゞ。風は、目にかゝらぬものなれば、見しなどいふべからず。こゝろみにいはむには、ものとやはしる。などこそいふべけれ。

今川義元

降りしきる雨にくつれて桶はさま
　たゝへし水もたまらさりけり

たまらざりけりといふ詞、叶ふべからず。水のたまれるは、少なきより多くなる意あり。

豊太閤

日の本にさるものありと犬しもの
　から人さへもかしてみにけり

何がしの御内に、さるものありと知られたり。など、軍ものがたりに、よくいふ詞なり。かば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かりの詞もて、豊公にかけていふべき事かは。猿といはむとて詠めるは、例の、大に優劣のけぢめも辨へざる僻言なり。

日の帝まもるしるしとおほはたの
み旗にわけし天のよさつら

大和めぐり（承前）

井上頼文

宮の右側に社務所あり。宮司、池田昇君に面會す。君は、古物を好まるゝ故に、種々の珍器、奇皿多し。床にかゝげたるは、春日赤童子が眼を怒らして、ふとくたくましき杖つきたる圖、楠公が千早籠城の時、造化三神を祈るとて、自ら筆を揮ひてかゝれきといふ、神代文字の神號なり。公が自筆といふことの信僞は、論ずるかぎりにあらされど、絹地も、墨痕み、古色蒼然たり。又、ゆくりなく石もて作れる古鏡を得たり。鏡背に神代文字あり。むかし、三輪神社の大鳥居に掛けきといふ、額面の神代文字に毫もたがはす。こは、もと、三輪の馬場村なる、大御輪寺の什物なりしが、又は、平等寺の秘藏品なりしなるべし。その鏡は、さきつ頃、ある人のもとめによりて遣したるが、實に、千古の逸品なりき。とて、鏡背を紙もてすりたるを示さる。おのれ原品を見ざれば、人類學者の云ふ、石器時代のものなりや、はた佩玉時代のものなりやは、定めがたかれど、搨本の筆意結構等より見れば、千古のものとは思はれず。これ例の百萬塔、金銀環、土偶の破片など巧に摸造する、一派の商人が手に出でたるにはあらざるか。鑑識に乏きものゝ、おしあてにいはんは、おそれあるわざなれど、試に述るのみ。なほ、好古博識なる學士

の考をまつ。

鏡背の文字、



暮色蒼然として、ねぐらもとむる鴉の聲、いとあはたゞしげに聞ゆれば、うや〳〵しく廣前にぬさしろたてまつりて、歸路にむかひぬ。はるかにみさくれば、三輪のかみ山、暮雲のひまにほの見えて、あはれさいはんかたなし。即ち車上にて、

うまさけ　みわのやま
あをによし　ならのやまの
やまのまゆ　いかくるまで
みちのくま　いつもゐまでに
つはらにも　みつゝゆかんを、云々。

と、額田の王のみうたをうたひかはしつゝ、わをるにしならの釜屋につきしは、ぬばたまの夜にぞありける。

五日（午後の記者は松本氏なり）

春日の神奈備に、藤氏の盛時を思ひ、金銅の廬舍那佛に、光ありし御代の昔を忍び、二月堂、三月堂に、足をとゞめて、咲く花の匂ふが如き、春の世も、つれなき嵐はのがれ難きを感じ、正倉院のついぢの芝生に、晝げのわりごをひらきて、これより御代〳〵の陵、古き都の跡吊はむとす。景清門をいでゝ、靡きたるは、佐保川なり。千鳥やなくらむ、蛙やうたふらむと、思ひしはあやな。流は絶え、土橋は傾きて、文字をとめたる木標は、旅人の袖うるほす媒となりぬ。あはれ、

淵瀬の常なきは、飛鳥川にも限らざりけり。と、吾、みやび男あらねど、旅衣の袖をぬらして、一滴の涙を手向け、行きて、法蓮寺村ある、聖武の御門の佐保山の南陵に詣づ、延喜、諸陵式に、兆域、東四段、西七町、南北七町、守戸五烟とあり。光明皇后の、佐保山の東陵、右にあり。式に、兆域、東三町、西四段、南北七町、守戸五烟とあり。走りて、法華寺に至る。昔、光明皇后の誓願もて建立せられ、墾田一千町を賜はりしこと、紀に見えたり。をばしまの擬寶珠に、豊臣秀頼が、御母寺にて、慶長六年辛丑の九月、片桐東市正且元、奉行して、建立したる由記せるは、中つ世に燒けたればなるべし。其の代には、いかにうるはしかりけむ。今は荒れはてゝ、讀經の聲もきこえず、香の煙も絶えたり。水上の池堤を歩み、仁徳天皇の大后、磐の姫の陵に詣づ。周圍、五百三十九間、阪の上の山陵と申しまつる。筆を走らして、その様を寫し、池の西をつたひて、平城帝の阪の上の陵に詣づ。式に、兆域、東西一町、南北一町とあり。次は、垂仁帝の大后、日葉酸姫の陵あり。狹木寺間陵と申して、其の地の字を御陵といふ。次は、成務帝の陵なり。狹城盾列池後陵といひて、字を石塚山といふ。山陵村の東に在り。式に、兆域、東西二町、南北三町、守戸五烟とあり。次は、孝謙天皇の御陵あり。高野陵といひて、字を高家といふ。西大寺の東北。式に兆域、東西五町、南北三町、守戸五烟とあり。池に、冬枯の蓮、風に破れてうかべり。去りて、南に走り、伏見村なる西大寺に至る。孝謙天皇の勅願もて、天平神護元年に建立せられたる伽藍なり。本尊は、丈六の觀音にして、洛陽より移しゝものとか。四天王は、天平神護元年の鑄造にして、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

増長天の一は、高野の帝、御みづから造らせ給ひしものといふ。やがて、伏見村、字、菅原に行き、菅原神社を拜む。いとさゝやかある神あびにます。避雷の御守數體を受け、宮人の敎へしまゝ、大臣といふ處を見むとてゆく。大臣とは、右大臣が誕生の舊跡を、村人の呼ぶ名なりけり。社より程遠からず、道の傍に在り。めぐり十間もあらむ。池に島を造り、碑を立てたり。梅と松と櫻とを植ゆ。梅王、松王、櫻丸にならひしなるべし。松は、常磐の色かへず、梅は、操を失はずして匂香ばし。櫻は、そのをりをいさぎよくす。世にありては心を合せて、その君を護り、死にての後は、枝をかはして、長く、其の御墓にさもろふ。（松梅櫻、實に、これ大和心をあらはしたるもの）噫、松梅櫻、その池水に影をとゞめて、長く臣たるものゝ鏡となれり。この里ふるく、菅原伏見の里といへり。菅公の遠つ祖、土師宿禰が

住ひしは、此の地なり。安康帝の陵は、寳來寺の奥にあり。遠ければ、遙拜して過ぐ。田部親王の御墓は、右にありといへど、道のついであしければ、直に、垂仁帝の、寳來山、菅原伏見の東陵に詣でぬ。わたり五町にも餘れる池、陵を周り、二つ三つの小島を浮ぶ。櫻の樹、道の左右にしげれり、畝火山の陵につぎて、壯大なるものあるべし。式に、兆域東西二町、南北二町、陵戸二烟守戸三烟とあり。かくて、齋音寺村を去り、三群四群おくれ先ちつゝ、招提寺にゆきぬ。聖武天皇の御心をもて、天平寳字三年に建立せさせ給ひし所なり。金銅丈六の釋迦佛は、御光の表に、千體の佛をきざみ、裏に二千の佛體を畫けり。南都七大寺の一にして、火にかゝりたることなし。樓門の額は、孝謙天皇の宸筆ありとぞ。寺傍にわせくらあり。さきに、井上先生、本堂の瓦は、極めてふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るきものなり。うつしおけ。といはれければ、手帳を出してかきつく。再走りて、藥師寺に至る。この寺は、元、天武の帝、造營の詔を下し給ひ、持統のみかど、十一月八日、高市郡、岡本に建て給ひしは、元正天皇の、養老二年、平城の右京、六條、二坊に移し給へり。即、この地なり。本尊は、海内に類なき名作といふ。六層の塔あり。天平二年の建立にかゝる。堂前に佛足石あり。高さ五尺、廣さ一尺五寸、厚さ二寸。大きなる足あとをゑりて、和歌二十一首を添ふ。その一は、

拾遺

三十あまり二のすかたつたへたるむかしの人のふめる跡ぞこれ。

いかばかり重き身なりけむと笑ひて、郡山に向ふ。いでや。このわたりこそ、昔、寧樂七代の花とうたひし、古き都の跡なれ。かの大厦高樓軒をならべ、大宮人の袖をつらねて往きかひし、大路、小路は、草生ふる徑となりて、一條より十三條までの街は、僅に、里の名に殘れり。公屋、茶屋、二條茶屋はあれど、茶賣る嫗もなく、杖をとゞむる宮人もなし。東は佐保川より、西は郡山に至る、茫乎たる一帶數里の地は、げにや、いらかの浪うち、民のかまどのにぎはひし所ありけむ。偖も暮れゆく秋の淋しさは、いづこも同じことなれど、昔忍ばるゝふるき都の跡にこそ、わきて深う覺ゆれ。木の葉を散らす秋風に、招くは、尾花か。はた、すゝきか。老いたる頭、はにあげてさしまねけど、人は訪はず。霜がれたる草葉の蔭より、人まつ虫のかれ〴〵に鳴くは、うき世を秋とやかこつらむ。（評、今昔の感に堪へず。）

青丹よし奈良の都に咲く花の
匂ふかごとく今盛なり

世の中を常なきものと今ぞしる
　　奈良の都のうつろふ見れば

など、口々にうち誦しつゝ行けば、立ちこむる霧を破りて、響くは、諸行無常の鐘の音。いづこの山寺にてか、つくやらむと見やれば、日は、仁其山の麓に沈みて、あかねの空に、二羽、三羽の烏、つれだちてかへりぬ。かなたの森のねぐらにや、いそぐらむ。遠山もとの闇は、やう〳〵に廣がりて、こなたの林も、はやくらし。をちこちに立つ夕げの烟は、空にきえて、曉空のゝこんの星のやうなる燈火の、影さへもりくるに、心細くて、いそげ〳〵と、郡山にかけつけたり。直に停車場に至り、汽車にて、奈良に入り、林小路町なる、開化天皇の陵に詣で、午後八時宿にかへりぬ。

先食烏

在近江　岡部　譲

近江の國多賀の御社に、先食烏といふなんある。そは、御社の左の方、御築地の内に、高さ四尺ばかりの杭の上に、方一尺ばかりの板うちたるが有りて、日毎に、御饌奉る前に、まづ土器に御饌を盛りて、そが上にのせ置き、神職手を拍てば、がうがうと答へして、一双の烏來り、啄むなり。さて、この烏も、御社の森の内に巣くひて、年毎に、四つ五つの雛を育だつることあるが、そが内に、親烏、必ず、二つを擇びて、おのが後つぐべきものと定め、巣立する頃より、親烏伴ひ來りて、その先食の御饌、啄むことを敎ふ。もし擇び定めたる外の子烏、啄むとすれば、親烏のしたゝかにその頭をつゝきて、いましむるさまなり。かくて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

その後継ぐべき子鳥、手拍つ音きゝて、ひとり至り、啄むやうになれば、親鳥は、外の子鳥をつれて、いづくにかゆきて、見えずなるならひなり。こは、いにしへより、一年も違ひしことなしといへり。さるに、今年は、こゝらわたり、年々に増しゆく銃猟者の、筒先にやかゝりけむ。この十一月の初めつがたより、二羽の鳥見えずなりて、神職等が、いかに手拍つも、たゞ、あだし鳥の聲のみにて、きゝなれし答へもなく、出で來ずなりぬ。いかにしつらむなど、かたらひ居りしに、同じ月の廿五日にいたりて、さきに、いづちへかいにし親鳥二つ、再びかへり來りて、もとの如く、先食の御饌啄むことをなせり。嗚呼、先食鳥、かく規則たゞしく、大神に仕へまつるを見れば、たゞ、反哺の孝のみにはあらざりけり。

衢口漫言（十）

白松園主人

やくなきひま費に、日も暮なんず。いでとて曳きもて走るほどに、調度とゞくべき處は、早く、つきておろしつ。今は、この物狂のみ載せて走るに、兒らが、戯れわざするやうにて、あふ人ごとに恥しく、心づかひせられて苦しければ、うたてあるしれものかな。此の野良にやうちすてゝかへらん。此の森の木にや縛めおかんなど、きはまりたる雑言いひちらしつゝ、暮れぬまに、辛うじて、その村につきつ。されど、この男、うつゝ心なければ、おのが家もしりたらず。かしこ。こゝ人に尋ねとへば、からたちの垣して、門たてたるうちなり。と云へば、げにいひけるやうにもある。よかるべきさまかな。ゐてこしかひもありげなり。

などうちよろこぶうちに尋ね得たり。うち見れば、まことに枳の垣つきあげて、少し朽ち剝げたれど、黒き四足門たてたり。この片田舎には、めづらしく、あるまじきをごりかな。なにがし殿のおはしますやしきといはんも、ふさはしきぞかし。いで、こゝなる若君〇〇〇〇おろしまつれ。たが、なさけなうも、かくはいましめたる。とて繩ひき解き、塵うち拂ひておろす。いで、われらも、さま變はんとて、かたみに帶ひきしめて、えさせなどする人の心のあさましさよ。』とはおぼしめさずやと、から〳〵とうちわらへば、『嫗もおのれも、げにこそとて、見かはしうち笑ふ。』さて、そのさき聞かばやと急がすれば、やがて、例の若君を中に圍みて、門の戸は閉ぢたれば、かたへのさゝやかなる、くゞり戸よりぞ入りたる。入りて見れば、こは、そもいかにと呆るゝもことわり、中は、すさまじき畑にて、すゝきまばらにところ〳〵おひたちて、半は、野らとなりたり。この野らの中に、一すぢのさゝやかなる道あるばかりにて、家めきたる者め目にはふれず、こは、狐のわざにやなどいぶかる。いかにもあれ、先づ、この道をゆきてんとて、その道にそひてゆけば、左にをれて、向ひにさゝやぶありて、枝さしおほひたる榎の、いとふとやかなるもとに、さゝやかなる白屋こそ見えたれ。近づきみれば、すゝけたる障子たてゝ、松の丸木柱くちさらぼひたるに、繩むすびさげて、竿をわたし、海松の如き袷衣めきたるもの、神通して、處せげにぞほしたる軒端に、けぶりうちたなびきて、いぶせげなる中には、麁朶たくにや。ばち〳〵とおとの聞ゆ。よもこゝにはあるまじけれど、問ひ試みばやと、一人が此の乾したる衣のしたをくゞりて、障子近くたちて、しか〳〵のう

ちは、いづこに候といへば、中には、だみたる男の聲して、そは、こゝもとにこそ候へといふ。これを聞きたるおのれら、いかでか呆れずてえあらん。只、かたみに見かはして、中なる若君男を憎さげにうち守りて、これが、多くの田つくる家のさまかと、いはぬばかりなるもをかし。

さてあるべきにあらねば、やう／＼障子ひきあけて入りぬ。四十ばかりの男、庭にむしろうちしきて、わらぢつくりゐたるにうち向ひて、われ等は、しか／＼の者にて、東京よりきたり。しか／＼、の子もち玉へりやといへば、この男、いぶかしげなる顔うちあげて、もたぬにもあらず、また、もちたるにもあらず。とのみ云ひて、なほ、わらぐつの手もやめず。わが親方、今年の春ばかりに、田舍より弟子もちたるに、此の程、その男物狂とありて、すべきやうなければ、里へゐていけと云はるゝに、里は、こゝのうちなりといへば、あさまだきより、車にのせてゐてきたり。こは、この子にはおはさずやとて、外の方をさしまねけば、二人して物狂をひき入れて、あるじの男にあはすれば、あるじ、ふと手をやめて、俄にけしきかへて、この物狂をきとにらまへて、やをれこの蓄生、よくもかへりきつるな、といへど、聞くらんともおぼえず。にこ／＼とうち笑みゐたり。三人の者は、あさましさかぎりなく、只、言もなくてまもりゐたり。おのれ、いと心もとなく、えしのびえで、あるじに向ひて、こは、何を怒り給ふやらん。病人におはする者を。いよ／＼み子におはすとあらば、渡し侍らん。うけ給へといへば、客人たち、きこし召してたべ。こ奴、世にあきしれ者にて、おのれ勘當して侍れば、ゐてき給へりし御志は、いとかたじけなけれど、こやつ、うち

へはしきみ一寸(いつすん)入れじと思ふなり。こゝな、犬恥(いぬはづか)しきしれ者。とく出でずやと云ひざま、物狂をつき出して、障子はたとたてゝ、客人たち、まづいこはせ給へとて、ゐろりさしふすぶれば、ゐるもはした、たつもはしたなくて、さはのたまへど、病人のさすがにあはれなれば、入れんとするを、あるじおしとゞめて、必ず、それ心(こゝろ)がけ給ふべからず。たしかに、うけをさめて候へば、うちすてゝ、こゝにより給へといへば、さはとて、三人くつぬぎて、にじりよりたり。さて、あるじがいはく、客人(きやくじん)たち、事のもとをしろしめさねば、いぶかり給ふもことわりなれど、こやつ、見(み)るめも穢(けがらは)しき畜生(ちくしやう)にて、誑(かた)り出(いづ)れば胸(むね)にひゞきて、にくさいやまさりて、といひさして、鼻(はな)うちかむ。やゝありでいはく、おのれが二親、此の世にありし時、このしれものをいとかなしうして、乏しき中よりも、

はしといふものは、求め出して與へなどしたるに、心あがりて、やう〳〵ひとゝなるまゝに、おのれがいふこと、爪(つや)の垢(あか)ほどもきかで、なにごとも、只、心のまゝにふるまひつゝ、遂(つひ)に、汗(あせ)あぶらになり、少許(すこしばかり)蓄(たくは)へおきつる金をかいさらへて、うせにき。うせたるまゝ、二年三年おとつれもせで、うちすぐしつるに、父、病(や)みつきて、此の世を去(さ)り、母もまなく、床(とこ)につきたるころ、しれものふとかへりきつ。おはぢ失せたる事をきけど、さばかり悲しともおもはず、おはばの病めるも、いたはりだにせであるを、母は、あやにくに、しれもののかへりきつるを、いといたううれしがりて、床(とこ)這ひ出でゝ、しれものが手を取りてなん泣きける。心ゆくばかりに、うちひしぎもしてましと、思ふばかりなりしかど、母の心にめんじ、たへしのびてありけるに、いとゞ、妻(つま)さへ熱病(ねつびやう)を煩(わづら)

ひつきて、二人、枕をならべぬ。しれものは、物うちくらふ事のみして、右の物を左にする事だにせねば、おのれ、一人して二人をみとるに、今は、家のわたらひするものもなければ、藥かふべきしろも盡きて、いかにせんにも、身一つにこうじ果てゝ、男なきにぞ泣きゐたるに、母は、つひに失せにき。父をうしなひぬと思ふまもなく、母をも失ひ、又、妻には病まれ、といひつゝ、松がさのやうなる拳して、まぶたおしぬぐふも、あはれにいと悲しと、三人は聞きゐたり。やよわが妻。客人たちにまゐらすべき夕餉の準備せずやと、かへりみいへば、あなたの暗きすみより出づるを見れば、やせに瘠せおとろへて、やつれはてたる四十ばかりのおうな、よろ／＼といざり出でゝ、われらに會釋して、やがてほと／＼と米など出すめり。此の時、おのれ思ひつるは、このつまもうせぬるよと思ひしに、さては、一人は生き殘りけりな、せめての幸にこそありけれと、やくなき心づかひの胸、やう／＼におらゐぬ。あるじ又いふやう、さて、うち泣きてのみもあるべきならねば、はふりのわざとり行はんと思ふに、せん香一すぢかふべきしろもなければ、案じわびて、やう／＼の事にて、ある旦那になげきて、三圓ばかり借りてきつ。あすは、これにて何事もとゝのへて、おくり出さんと思ひおきてねたるに、夜あけて見れば、かの三圓、つゝらのおくに入れおきしが、いかにさがせども見えず。やゝと肝つぶれ、心も狂ふばかりにありて、たちさわぐに、しれ者、いづこいきけん。共に見えず。こやつ、またさらへつるよな。と無念の腸ちぎるばかりにて、表ざまに飛び出したるまゝ、その後の事はしらず。忽ち、のうのうと、耳もとにわが名をよぶ聲に、目ひらき見れ

は、此の村の何がし、おのれをかきいだきて、水ふきなど介抱し給ふありき……。

あはれ、末のあるべけれど、右の處までにて、書き止みたり。はかなきすさびあれど、いさゝかの談片をさへ、漏なく書き止めたる注意のほどの、うるはしさに漫言に加へおきつ。

あはれ、兄のふる里にありける時、歌文など習ひに來にける少女あり。このをとめ、いとさかしく、歌文の才もすぐれたりしが、後、兄の東京に上りける時、かの少女、なにがしのもとに嫁ぎぬるよし、報げ來りぬ。よりて、之が返して、いはひ與へぬる文のしたがき、反古の中より出でたれば、左に掲ぐ。

とくよりの御ふみ、ありがたくはい見いたし候。御きげんよく、御加年あそばされ候よしにて、めでたき事にぞんじ候。わたくし事も、たびのそらにて、からき年をむかへて候へば、御心安くあそばしめし下されたく候。さても、新玉のとしたちかへりし、めでたさにあはさせ候、こよなき御よろこび、うけたまはりし事かな。かさね〴〵めでたさに、めでたさをそへて、御よろこび、かへす〴〵申上候。としごろの御勉強も、只、この一事に候へば、今は、御立身のかど出にて、いはゞ、朝日のさし出でたる所に御座候。ふたはしらの親たちをはじめ、おはぢ、おばばさへもち給ひて、このうれしき立身の花を見せ給ふらむ、御身の仕合、なに事か、これにしかむや。しかしながら、ひとへに、親たちの御めぐみに候べければ、このめぐみ、長くわすれ給ふべからず。ひたすら、夫の君にまめしき道をつくして、子孫あまたまうけ給ひて、親たちの御心を安めたまふこそ、孝の道にもかなひ申すべ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

けれ。この道は、おのれ、そのかみ、かつ〳〵申おきつれば、今さら、ことには、申あけずもあらなん。只、かへす〴〵、女は三界に家なし。一たび夫の家を出でゝは、覆水盆にかへりがたし。と申す、ふる事をわすれ給ふべからず。かゝる事は、おのれら如き、なまわかきものよりは、おいたる人ぞ、事なれておはすべければ、只、おいたる人の詞をかしこみて、いさゝかも、たがひ給ふべからず。

萬代を行すゑかけてちぎりけむ
　そのことの葉をあたにちらすな

めでたく、いはひをさめ候。かしこ。

さても、東京は、國文いよ〳〵さかりきて、少し身分よろしき女は、みなきそひて、かなを習ひ申候。されば、かなの手本たくさんに出で申候。女は、てがみなんどかくには、わざと眞字をもちゐずして、むねと、かなをおもしろくかきちらし申候。にては、かなをかくかたが、ほまれのやうになりゐ申候。それはさておき、むかしをわすれず、御消息下され候御心根、何よりうれしく、かへす〴〵、文章よりはじめて、はじめをはり、くまもおちず、よく〳〵拝見いたし候。先は、とりあへず、御よろこびかた〴〵、御返事までかくなん。なほ、をりふしにつけては、おとづれこひまつり候。わたくし事、今年四月に、しけんある事に、よるひるかけず、べんきやう致しをり候。今は、こゝらあたりに、筆をとゞめ申候。あなかしこや。

明治廿七年一月八日午前　健之助

申す

つね様

御こしもとの人に

我兄は、千蔭翁の筆意を習ひ得て、假名がきはいみじう巧みなりき。此のてがみも、走りがきながら、めさむるばかり美しく、今は、見るさへ胸いたくなん。（以下次號）

教の庭

十二月廿日兼題

埋火

天　肥後國菊池郡城北村　佐々有隣子

うつみ火をかきおこしつゝかすゆ酒
　うちすゝろへはふゆとしもなし

評、萬葉集の詞をとり出て、よみつゝけられしは、古學の力ある君と見ゆたり。

地　埼玉縣川越町十一番地　横田音羽子

はな瓶のうめもかをりてよもすから
　はるおもほゆるうつみ火のもと

評、のどかにゝほひふかし。

人　和泉國泉北郡深井村　福原菫子

鐘の音のさゆるしも夜をよそにして
　はるをしめたるうつみ火のもと

評、春のみならで歌のうへにても、高き位をしめられたり。

甲之部

群馬　山田婦美子

かたりあふこと葉の花もさきいてゝ
　はるめきにけりうつみ火のもと

東京　當間みすの子

うつみ火のあたりもさむき雪の夜に
　ものうるしつのこゑきこゆなり

乙之部

中村いそ子

うつみ火のあたりのとかにはらからと
　しは折りくへてかたるたのしさ

濱口　[illegible]ころく子

老の身の寐さめのともとうつみ火に
　ひとりよりそふふゆの夜半かな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きり火桶とりかこみつゝはらからと
　むつみしむかししのばるゝかな　仁村きみ子

埋火のあたりのどかにはらからと
　かたる夜はこそたのしかりけれ　赤尾つた子

あつふすまかつけとさむき冬の夜を
　うつみ火なくはいかてあかさん　村上友代子

たらちねもはらからも皆まろ居して
　あたりにぎはふうつみ火のもと　大久保伊野子

おもしろく花にまかひてちるゆきを
　ひとり見はやすうつみ火のもと　向山まき子

あつふすまかさねなからも冬の夜は
　いのちとたのむねやのうつみ火　北島操子

まとゐしてかたるも嬉しうつみ火の
　あかきこゝろをあかしあひつゝ　吹田たけ子

ふゆの夜の寒さのみかはさひしさも
　なくさめらるゝうつみ火のもと　稲田さなゑ子

うつみ火のもとに寄居てとしよりの
　むかしかたりをきくそたのしき　岡田美喜子

たらちねと共にむかへはあたゝかき
　なさけもこもるよはのうつみ火　瀬戸ゑい子

おひやれとまたたちかへるから猫も
　ふゆこもりするうつみ火のもと　田村稲子

冬としもおほえさりけりうつみ火に
　つくやさくらのすみもかをりて　岡田春子

よもすから閨のうつみ火かきおこし
　むかしをかたるまとゐたのしも　荒野たに子

きのれなく蟬するねわたるさ夜なかに
　またかきおこすねやのうつみ火　田代艶子

たきもの丶梅か香くゆるうつみ火の
　あたりはいともはるめきにけり　服部正子

まとちかくちりくるゆきを花と見て
　さむさおもはぬうつみひのもと　早川たれ子

ものひさく曉の夜さむをおもふ身も
　なほさりかたきねやのうつみ火　近澤松子

うつみひにましはおりくへゆふしもを
　ふみつゝかへるともをこそまて　松村あさ子

思ふとちかたりかはしてふくるよの
　さむさわするゝうつみひのもと　椎野鋭子

丙之部

曉かやのいた間ふくかせみにしみて
　うつみひたよるふゆの夜半かな　今井たゞ子

ふるさとにありにし冬ははらからと
　まとゐせし身のいまはさひしき　鴻巣とし子

埋火をかきおこしつゝよもすから
　ふみよむ身こそたのしかりけれ　菊池よね子

埋火をかきおこしつゝかたる夜は
　よさむもしばしうちわすれけり　木村とめ子

ふりつもるゆきさへ花と見ゆるかな
　あたりのとけきまとのうつみ火　柏木すゑ子

うつみ火をかきおこしつゝ思ふかな
　わかふるさとのふゆはいかにと　近藤せつ子

うつみ火をかきおこしつゝ語る夜は
　さむさも知らてはるこゝちせり　村田たみ子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かきおこすこのうつみ火の無りせは
ふゆいかはかりわひしからまし　幸徳千代子

うつみ火のあたりのとかにさね渡る
しも夜も知らてはるなまつかな　高塩こう子

あらしふく冬の夜さむもうつみ火の
あたりははるのこゝちこそすれ　中村りき子

おもふどち火桶のもとにまとゐして
むかしかたりにふくる夜半かな　秋岡れつ子

まと居してしたしき友ともろともに
むかしかたらふうつみ火のもと　篠塚たけ子

冬ふかくなり行くほとにうつみ火を
ともとなすこそたのしかりけれ　沼井あい子

風かせのさゆる夜るへもしめやかに
ともとかたらふうつみ火のもと　鷹山みゑ子

うつみ火はこよなき冬のともなれや
ねさむることにかきおこしつゝ　岩田よれ子

思ふどちむつかたりするよひのまに
うつみしすみはゆきとなりけり　増戸そで子

埋火をかきおこしつゝつくつくと
すきしむかしをおもひやるかな　正木たね子

うつみ火にさむき夜半をも忘れつゝ
かたるもいとゝのとけかりけり　今井りう子

うつみ火をかきおこしつゝはらからと
夜さむわすれてかたるうれしさ　清水てふ子

さむき日は火桶はかりをともとして
ふみ讀むこともおこたりにけり　太田のぶ子

うづみ火を文よむまとのともとして　杉山君代子

うつみ火のあたりは春のこゝ地して
ふくるも知らぬふゆの夜半かな　林きみ子

うつみ火の白くなるまてちゝはゝと
かたること葉のはなもさくかな　會田まつ子

埋火をかきおこしつゝはらからと
みやこのことをかたりあひぬる　小川つる子

夢さめてかきおとろかすうつみ火そ
かたる今日こそたのしかりけれ　飯塚まづ子

きり火桶とりかこひつゝともどちど
ふみよむ夜半のともにそありける　丸城さなり子

たゆみなく炭さしそふるうつみ火は
身のゆくすゑをかたり合ふかな　小野はま子

木からしの風ふきすさふふゆの夜に
さなからはるのこゝ地こそすれ　須佐きん子

うつみのあたりは冬のさむさをも
ともとたのむは火をけなりけり　國府田はる子

埋火をかきおこしつゝよもすから
しはしわすれてかたるたのしさ　柴田のぶ子

うつみ火のあたりによりてふる里の
身の行すゑをおもひやるかな　松山かずね子

うつみ火をかきおこしつゝもろ共に
ちゝはゝなしものふよはかな　栗原まつ子

埋火をかきおこしつゝはらからと
むかしをかたる夜半のたのしさ　赤尾かつ子

埋火のもとによるよるはらからと
まとゐせし夜のむのはるゝかな　藤波たま子

たのしくふゆの夜をふかすかな

うつみ火の雪となるまてふみゝつゝ　こよひもいたくふかしつるかな　關口きせ子

うつみ火なかきおこしつゝ語らへは　夜のふけゆくもおほえさりけり　田口すみ子

かきくらしゆきふりすさむ冬の夜は　うつみ火なこそともとたのまめ　金田とめ子

夜もすからもの思ひつゝあけぬれは　ひなけのすみもしらみゆくかな　永井あき子

冬の夜にねやのうつみ火かきおこし　おいのねさめのともとなしけり　宮武てる子

まくらてふ炭さしそへてうつみ火の　あたりはふゆもはるめきにけり　安藤ひさ子

うつみ火なともとなしつゝ冬の夜に　ふみ見ることそたのしかりける　林みほの子

うつみ火なかきおこしつゝ思ふとち　むかしかたらふふゆの夜はかな　足立こう子

うつみ火の灰かきおろしつく〳〵と　すきしむかしのしのはるゝかな　加藤まさ子

うつみ火なかきおとしつゝ語らへは　ふゆの夜さむものとかなりけり　佐藤わき子

うつみ火なきか起しつゝはらからと　むかしかたるそたのしかりける　金井ゐき子

埋火なかきおこしつゝつく〳〵と　ふるさとひとなおもひやるかな　吉川仲子

うつみ火の白むもしらてかたる夜は　ふゆなわするゝこゝ地こそすれ　堀内ふき子

きり火桶かきなてつゝもつく〳〵と　關口きれ子

うつみ火にさむさ忘れておもふとち　むかしのひとのしのはるゝかな　横田秋子

寒き夜にふみよむとものうつ火も　嫌ものかたりに夜なふかしけり　馬場邦子

埋火なかきならしつゝはらからと　おもへはおやのめくみなりけり　北島功子

うつみ火のあたりなからにけふも又　むつかたりする夜ころたのしも　北島松子

うちよりてかたるも樂しうつみ火の　はるこゝちしてくらしつるかな　岡田柳子

いふ事もなきうつみ火なかきおこし　あたりははるのこゝちのみして　穗積稔子

山さとは火なけはかりともとして　おいかれさめのともとこそすれ　佐藤そう子

あたゝかき火桶のもとにまとろみて　なすことなくて夜なふかしつゝ　篠田圓子

おもふとち語り逢ふ夜はうつみ火の　ゆめのはる野にあくかれにけり　岩田春子

ころもたになき人なしもおもふかな　しろくなるまて知られさりけり　重原春子

うつみ火のほとりは春のこゝちして　ゆきの降る夜に火なけかこひて　田村道子

うつみ火に冬のさむさもうちわすれ　ちりくるゆきもはなとこそみれ　伊勢村春子

うつみ火のもとに集ひてへたてなく　かたる今日こそたのしかりけれ
かたりあふ日はふゆとしもなし　大阪　谷信子

きゝふけてねられぬまゝに老の身の
ともとそたのむれやのうつみ火
伊勢村花子

冬の日のしたしきともとうつみ火の
あたりをさらすなるゝころかな
春木たま子

學ひつゝ夜や更けにけんうつみ火の
いつしかはいとなりにけるかな
高森加之子

うつみ火をかきおこしつゝ語らへは
ふゆの夜なからみしかゝりけり
名木山勝子

うつみ火はさなから春のこゝちして
夜ふかきふゆをなくさむるかな
三輪はる子

たらちねのおやとかたりて冬の夜の
さむさおもはぬうつみ火のもと
泥堂菊代子

くれたけの世にはしられぬ春なれや
うめか香くゆるまとのうつみ火
桝田益子

うちよりてかたるも樂しうつみひの
あたりははるのこゝちのみして
福島ます子

たへかぬるさむさをよそにふゆの夜を
あかすもうれしうつみ火のもと
中舘やう子

桐火をけかきなてつゝもわかはるを
おもひおこすそなかしかりける
上原のふ子

うつみ火のあたりに友とかたる日は
ふゆもはるなるこゝちこそすれ
田村多豆子

うつみ火のあたりを家のはるにして
ふりつむゆきをはなとこそみれ
村上操子

うつみひの白くなるまてまとゐして
むつかたりすることそたのしき
武田龜子

きゆるよのうきをさくらの枝すみに
鏡山増代子

うつみ火の邊りのとけくかたりあふ
ことはのはなもに匂ふうつみ火
内田さた子

ふけ行けは寒さはいよゝまさりつゝ
ひとのこゝろもはるめきにけり
小川たき子

老の身もふゆのよさむをわするゝは
はなれかねけりうつみ火のもと
田代喜和子

なつかしきうつみ火さへも今ははや
たのむ火をけのあれはなりけり
田代綾子

霜夜にはおいのともなるうつみひの
きねはてぬへくよはふけにけり
服部萬子

けさの雪おもひもかけすうつみ火の
あたりはなれてねられさりけり
河合ぬひ子

霜さゆるよはともしらてふけにけり
あつきなさけによりてこそみれ
三宅中枝子

おやも子もこゝろのとかにまとゐして
ふみをともなるうつみひのもと
牛山棠子

あつふすまうちかされても風さむみ
たのしくかたるうつみ火のもと
坂本登子

木からしのふきすさふ日はいとゝしく
いよいよたのむ夜半のうつみ火
佐々小琴子

かみな月今日もしくれのそらさむく
匂た火のあたりはなれさりけり
佐藤玄子

うつみ火の白くなるまてまとゐして
はなれかねたるうつみ火のもと
椎野清子

ふりつもるこすゑのゆきを花とみて
むかしかたりによをふかしけり
椎野秀子

はるをむ匂ゆるうつみ火のもと

くれなゐに匂ふさくらのうつみ火は
さながらはるのこゝちこそすれ　椎野ぬき子

人とはぬしもよのねやのつれ〲に
うつみひのみをともとなしけり　椎野薫子

おいぬれは火桶はかりをともとして
けふもくらしつひたやこもりに　高石登代子

重ぬへきふすまさへたになきひとを
おもひこそやれれやのうつみ火　山本梓子

うつみ火ははやも白みてねやの戸の
すきもるかせそいとゝ身にしむ　飯村あき子

十二月廿日兼題

歳暮の感

東京神田錦町一ノ二〇　名木山勝子

地

軒たちならぶ大路が家も、新らしき年迎へんとや、まだきに、煤拂ふ音かしましく、里のうなゐ子も笑みを浮べて、樂しき日のはやう來よかしと、をよびのみ折るめり。春は花、秋は紅葉と、思へばながき一年も、はや、いつしか殘り少なうなりにけり。此のころ、そも、おごりの秋霧にやへだてけん。暮の忙はしさにやあらん。とふ人もなき賤が伏屋、のどけき春の朝も、みどりの蔭なつかしき夏の日も、月淸き秋の夕べも、あるは、はださむき雪の夜も、かはる事なく打過せる窓のほとりが身も、何となう急がるゝ心地して、なすべきわざの手につかぬばかりなるぞあやしき。さるは、いかで今日のくれゆくをのみ、惜みやはする。思へば、げにきのふといひ、けふと暮して、過ぎ行く月日は、射る矢の如きものから、少年老い易く學成り難しとか、いにしへ人のいましめしも、さることながら、駿れたらぬ我が心の駒、いかにはやるとも、ひまゆくかげに、おどてきはれむ。さるに、日ごとわすありと、思ふ心にはかられて、いやが上に、手綱とる手のおのづからゆるみて、進まざりつるこそいとうたてきわざなりけれ。さても、年暮れぬときゝて打驚き、あはてふためき、つもる怠りを俄に補はんと思ふぞ、いと〲口惜しき。いざやこれよりは、我も共に、新らしき年を樂しみ迎へん。さて、今年に及ぶまで身を怠らしめたる、わすありと思ふあしき心を、つとめておこるごとに、蹄の先にかけて亡ぼしつゝ。樂しと、人々の心浮きたつ花の春も、こゝこそと、

若葉茂れる下かげの夏には、螢をあつめ、月清き秋の長夜はさらなり。はた寒き冬のよひには、雪つもる枝をかざして、手綱とる手のゆるまぬやうになすのみかは。行くかぎり、歩むきはみ、むちとりて急がせなば、いかで駑馬も、駿馬に近うなりて、日かげゆく駒にも、追る丶事のすくなうこそならめ。さらば、かならず年の暮なりとて、あはつる事やあらむ。驚く事やあらむ。やがて、業卒へて、たのしき限りあるべし。かつは迎ふる新年もいかに嬉しう、さらに、ことしのあたらしき計をめぐらすにいたるらむ。あはれ。悔ゆことなくてすみぬべきをや。されば、これよりはせんすべなきわづかの日數なれど、とかくして業を卒へ、さて來ん年の此の月のけふをぞ、めでたく迎へなむ。いとゞ心の駒にむちうちて。など、思ふがまゝに、これや後の思ひ出でにこそ、とてかくはしるしおきつ。

東京本郷龍岡町日本女學校　大久保伊野子

人

光陰は矢の如く、時節は流る丶水の如し。と古人のいひけんも、げに、宜なるかな。明治三十四年は、今や暮れなむとす。つら〳〵顧みれば、明治三十三年の歳暮に際して、感ぜしこともあり、豫定せしこともありき。されど、今日に到りて見れば、其の感ぜし所、豫定せし所、大方、なしはてたるはなし。あはれ、愚かなるは吾が心なるかな。聖賢君子すら、寸陰を尺璧より貴しとして、忽にしたまはぬものを。愚昧なる身にて、夢か現かまぼろしかの如く、此の貴重なる月日を、なすこともなくして、空しく過しつることよ。盛年重ねて來らず、一日再び晨ありがたしとの詩をわきまへながら、罪深きいたりならずや。實に、去年の吾と、今年の今日の吾と、學術に品行に、いかばかり進歩せりや。増したるものは、齡のみならずや。しかし今に至りて、いかに悔ゆればとて、死兒の齡を數ふるに似て詮なし。はやなげくまじ、いたむまじ。たゞ、責むべきは、吾心にこそあれ。來三十五年は、新しき年をむかふると共に、心をとりなほして、今日此の歳暮に際して感じたる心を心とし、きもに銘じ、つとめはげみて、以つて、今年空しく費したる光陰の、萬分の一をもとりかへさでやは。

東京本郷龍岡町日本女學校　柏木はるゑ子

めでにし花も夢とうつろひて、青葉のかげこまやかなる夏のさかりも、いつしか、荻の下風袂すゞしく、夕ゆかしき秋となりて、くまなき月に夜を明し、虫の聲に世をはかなみて、絶えずぬるゝ袖の時雨も、今は霜とむすびて、冬かれの野山のけしきも、いとあはれにて、年の名殘はいよ〳〵せまりぬ。此の頃の空に、すさまじくすめる月の光など、こよなう心ぼそし。ちまた行き通ふ人の足さへ、急ぎまどへる様など、いとおかしくも、また、あはれなり。げに年月の名殘こそ、夢現とも分きがたきものなれ。つく〴〵と思へば、已れたらちねの大かたならぬ情をもて、古郷遠く別れ参らせて、この東の都に物學びしつゝ、早や二とせに近くなりぬ。さるに、しるく身に從ひし業とてなく、かくて果てなば、如何にして父母の恵に報いまつらむ、といとむねいたし。されど、是とて、よも已れ一人にはあらじ。萬づ思ふに違ふは世の常なれば、いかに惜しむとて、流れ行く年月、いかでか止め得べき。たゞ、さればこそ初春をたのしみて、勉めはげまんとて、よしなきくり事こゝに止めぬ。ぬは玉の夢と消えゆく年月は
　さめて名殘の惜しまるゝかな

（以下原稿到着順）

堀内ひさ子

今更、ひまゆくこまの足はやきをかこつにはあられど、昨日とすぎ、今日と暮しつゝ、いつしか、齢をかさぬべき時とはなりぬ。あなあはれ。つら〳〵とこし方を忍ぶに、春の花秋の月とてうかれしにはあられど、しるき功もあらはれず、實に口惜し。身の怠りとは云へ、いと〳〵なげかはし。むかし、唐の朱文公とか云ひけん人は、世に博学のきこへたかきに、少年易老の詩につくりて、身のいましめにせしとかきく。我は、なにこともなしねず、來ん年も年も暮れなばには、むかしの人の云ひけん、一生涯は春の夜の夢のごとし、の言のごとく、日月にせきもなければ、むへに此の世送るならむ。されは、新しき年を迎ふるとゝもに、汲みそむる若を水に心を清め、怠らず、日を暮さなん。口をしかりしことよ。今更にかゝること書きつくるは、たらずものゝしるしやあらはれたると、人のそしりもはづかしけれど、さて、後の戒め草にもとかくなむ。

菊池かれ子

のどかなる花の春より、青葉しげれる夏も、はや夢のまに去りぬ。實にひま行く駒の足はやみ、昨日今日とすぎ行く程に、はや今年もくれとなりぬ。去にし事をかへり見れば、身には何の成せる事もなく、あたら月日を、空しく過ぐせしこそくやしけれ。彼の心なき草木まで、花咲き實を結びて、己がつとめを終へしに、我のみかゝるさまかと思へばめ、でたき年を迎ふるが、何となく、恥かしき心地す。あゝ、今くゆるも何の甲斐なし。明くる年より心を改ため、學びの道にいそしみ、今日までの怠りをかへさばや、と思ひなりぬる。

又、考へ見れば、明くる年、したしき友と埋火を友として、かゝる

たゞあるは、はれつくなど、思へばうれしくもあり。去にし事を悔ゆるも甲斐なければ、改まる年と共に、かほりゆかしき梅におくれず、勤めはげみて、父母の心をやすめばやと思ひなりぬ。

濱口　ころく子

ひま行く駒の足はやみ、あはれ、今年も二日三日のくれとはなりて、何となう心細し。さて、日頃たしなみし日記帳をとり出し、一とせ中の事どもくりかへせど、ことに、きはだちし事もなし。ああ、此の再びかへらぬ光陰を、かくむなしく過しゝにや。思へば思ふほど、口惜しき極にこそ。げに、我ながらあさましき事なり。かく、今更にくりかへせどもせん方なければ、來むとしの始めよりは、必ず心を改めて、學びの道にいそしみ、今年にまさり、萬事につとめ勵みて、父母の御心をやすめ、其の御恩の萬分一をも報いばやとのみ考へぬ。

中村りき子

流れはやき飛鳥川の、今年もはや暮れなんとして、殘る日數少なくなりぬ。あゝ、古き諺に、光陰は矢の如く、歳月は流るゝ水よりもはやし、と云ひし如く、明治三十四年も、ゆめ現の間に過ぎ行きて、新しき年は目前に近づき來りぬ。我が今迄なし來たりにし業どもを、かへり見れば、去にし年のはじめ、我が心に定めし事の萬分の一だになし得で、たゞなん〳〵として、かくまで長き年月を徒に送りしのみにて、我が身にそひし事は、齢の一とせ一とせに、一づゝ加はり行くのみ。あゝ、思へばかなしさの至りなり。年毎に古き年を惜しみ、我が業を成し得ざりし事を悔むは同しけれども、去りぬる年は歸り來ず、新しき年は同じからず。されば、これよりは、新しき年をむかふると共に、心の駒にむちあてゝ、手綱引きしめ、たゆまずうまず、學びの林に分け入らんとこそ思ふなれ。

小川つる子

月日は實に水の流るゝが如く、暑さに堪へかねしは、まだ昨日のやうにおぼゆるに、いつしか、殘り二日とはなりぬ。つら〳〵我身をかへり見れば、學びのわざはいとつたなきに、かくも月日のきねゆくはと、いかにくゆとも、かひなき事にしあれば、今より、むらぎもの心ふりおこして、學びの道をいそしまん、と思ふ折から、ふと古諺に、今年學ばずして來年ありといふ勿れ、といふ事思ひ出で、いと恥かしさに堪へやらずなむ。

鷹山美惠子

今年も、はや殘る二十日のみにて、暦も、やう〳〵軸のあらはるる様になりたり。實に、年月の過ぎゆくは弓矢の如く、一たび放たれたる矢、またかへらず。諺に、一年の計は元旦にありとあれば、それに從ひて順序を定めたれど、今となりては、その一をも、なすものなくして經にけり。實に、口惜しき限ならずや。世は、定ゝなきこそよけれの如く、それもさることながら、惜まるゝも、年の初めにあり。誰しも、年の過ぎゆくを知らざるものなきに、その時になりて、初めて夢打ちさめたるが如き心地して、あるは惜しみ、あるはなげくも、おろかなり。今年この年、夢か現かうちまじろく間にすぎて、今さら、たゞ惜むばかりなり。

北島功子

をしむにつけて、としといふ名も、實にけふこそとしられけれ。睦月の春を祝ひ、彌生の花に浮かれ、ふん月のころは、暑熱に苦しみ、長月の末となりぬれば、やう〳〵に肌寒き秋風立ち、さては、露をよすがに鳴くむしの、哀れを袖にかこちしも、はや、いつしかと暮れ行くほどに、今はもろ手に餘る日數も、いと〳〵はかなくなりぬ。

あはれ年のはじめにかぞへおきつることの、いまだ、そが、半

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ばをだにも果て得ざりつるは、我身一つの怠りながら、又、今更らにおどろかれぬる。さらでもさがおろかしき身の、わけて幼き時より、母の慈愛に洩れて、何かと心なき、家のつとめの遣る瀬なくて、讀み書く道、裁ちぬふ業など、殊にたど〳〵しきを、日ごろ、みをしへ賜りし師の君達の、今年は何の業をか成しつるなど、問はせたまはんには、さて、何とか答へまつるべき、いといとはづかしくて、面なきを。よしさらば、來む年こそは、いよ〳〵はげみて、いとせめて、厚きめぐみの一ふしをだに、報いまゐらせばやなど、その年の終りに、おもひいでらるゝこそ口惜けれ。實に、はじめより常に、さるべき、心がまひしたらむには、あはれ、かばかりの悔はあらざるべきを。

かぞへおきしことの半ばもはてぬ間に
　あはれことしもくれむとすらむ

人皆のをしむ心のはかなさよ
　にはかにきつる年の暮かは

くれて行く年にはかけもなきものを
　なと人の身に殘るよはひぞ

佐々有隣子

續拾遺和歌集の歌に、行年を〻しめば身にはとまるかと思ひいれてや今日をすぎまし。と詠めしもうべりけり。あはれ、今年はいかなりし年なりけん。二月のはじめつがたには、妾が奉職する尋常小學校には、縣廳より、一等就學旗を授與せられて、就學生をはげませられ、五月のころは、皇孫殿下の御降誕を祝奉りて、小學校に宴をひらき、十月の三十日は、勅語奉讀式を擧行し、十一月の天長の佳節を祝ひては、生徒を引連れ、郊外の運動を催しなどして、一年中にうきことをしらず、嬉しきことのみつもりつもりて、歲の暮とはなりぬ。吳竹の一よあけなば、今年にいやまして、大御代はいよいよますます、豊かなる御榮なるらん。あなたのしき除夜なるかなと、一筆かくなも。

桝田益子

花紅葉を偲びしもきのふと思ふに、飛鳥川の流れよどみなく、けふははや、年のまうけにいそしむ時とはなりぬ。思ふもかしこかれど、久方の雲井の庭には、大まへつ君のいで入り繁く、百々の司には、萬機を省し給ふにいとまなかるらん。都大路は、常より人の行かひ多く、商人の家には、しめ縄、ゆづり柴、柊、なよしなど、年の物置きならべ、市女は、松の小枝に梅の折枝とりそへて、うりあるく聲、ちまたに賑はし。老人の身につもる歲をなげくあれば、小指をりて待ちよろこべる、あげまきあるぞとり〳〵なりけるも、こゝかしこにつどひて、宴げすなるは、年忘れといふまどゐなるべし。はた、世の塵の交ひをたちて、靜げき窓の内の埋火に梅が香くゆらせ、櫻炭に木の芽煮て、末の松山事もなく年浪のこゆるを寿び、松風に通よふ釜の音を千代と祝ひて、新玉の年を迎ふる人もあるべし。獨、我が學びの海の机の島は、浜風こそふかれ、怠りの塵うづ高く積りしを、拂ひもやらず書きつめし藻鹽草に、玉もまじられねば、心の鬼にさいなまるゝを、なやらふすべもなきをいかにせむ。さはいへ、軒毎に、ひくしめ、縄、門毎に立つられて、年を迎へん。心の松の色のみは、位山、岑も麓も鄙も都も常盤ならんと、思ふ心のまゝを、年のいそぎのいさゝか書きしるしぬ。

軒ごとにひくしめ縄のしみゝにも
　ものいそがるゝ年の暮かな

福原董子

きのふといひ、今日とくらつゝ、あすか川の流れは早く、いつしか、明治三十あまり四年も、のこり少なくなりぬ。こん年を向へんと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、家々は、煤拂ふもあれば、にぎはしう其のいとなみに、よねんのなきは、みるから心の勇むものにこそあなれ、つら〱かんがふれば、かなしき事のきはみならずや。ちりし花は又咲くことはあれど、とこよにかへりし雁かれも、また秋風立てば歸るこ とはあれど、一たびゆきし此の年は、いつかかへりきたるべき。あはれ、中々にかなしく惜しきは、としのくれになん。

岡田柳子

あはれ、今年もいつしかくれて、又、新らしき年をむかへんとす。ちまたは、早も、みどりの松竹よそほひ立てゝ、そが心もちにいそがはしきを、おのれは、只、夢こゝちのみせらるゝぞいとはかなきや。あゝ、此の年の暮よ。思ふ事、皆、なしをへて、新年をむかへたらましかば、いかに心地よく、嬉しからましを、一とせの長き月日、いかなるわざをつとめて、暮しけん。一つだに、進みしと思ふ事はあらざるに、早くも、年はくれなんとす。

行く水のゆきてかへらぬ年月を
　　あたにすくせし我そはかなき

と、今更にかこたるゝも愚かなりや。

岩田春子

流れて早く過ぎ行く。月日、止めむ由もなくて、昨日は過ぎ、今日も暮れ、今年も早や殘り少なうなりて、いつしか、花鳥の春の待たれて、我が身のふりなん事も打忘れ、柵かけてと思ふ事もなきは、今更ならねど、いとをかしうてなん。歳暮のならはしとて、いつこも、煤拂ひ、こゝには餅搗きなど、あるは、ゆかしき贈のよりつどひて、年忘れといふまどゐなど、くさ〴〵のすさびには、いとまなきにつけても、實に都大路の思ひやられ、羽子手まりなど玩ぶ子等が、春待つ心の忍ばれて、いと羨まし。老行く身にとりては、楽しさ悲しさ様々の思ひいでられて、空しく暮せし事の年毎に新しう忍ばれて、我が身ながらうらめしく、螢雪あつむれども、光はそはで、又も甲斐なき暮れを迎へ、返らぬ光陰を一夜の夢と過せしとは、おろかと云ふも亦愚の極にこそ。

はかなくも月日ながれて飛鳥川
　　あすひと日ともなりにけるかな

椎野秀子

實に、年月の移りゆくほど速なるものはあらじ。きのふとすぎけふとくらして飛鳥川ながれてはやきつきひなりけり。と古人の云はれしも思ひ出られて、指をりかぞへ見れば、今年も殘り少うなりにけり。おのれ、何事をなしてこの一年を過しけんと、文机に打むかひ見れば、まなびてん、よみてん。と思ひし文も、皆中ばにて、住の江によする年なみかぞへらるゝも、いといみじう口をしかり。いかでかく悔ゆるとて今更せんすべなければ、なほ、よみさしの文開き見れば、折もをりとて、唐人の、今年まなばずして來年ありと云ふなかれと。よまれしにあへる、猶更、怠りの身にしみて、一しほ、はづかしく、いでこを心にきざみて、こむ年の今日をや、たのしく迎へむとこそ思ひなりぬれ。



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

樂園

天津籠城中の鄭夫人(五)

森林生記

前回に記したる如く、鄭夫人は、胡五(前回に、胡五とふり假名してあつたのは、胡五の誤り。)を呼びて暇を遣らんとせしが、彼れは、中々忠義者にて、自分を、主人が見限りて、暇を出すのかと思ひ違ひ、泣て宥恕を乞ふから、決して爾ではないと云ふ事を、說き聽かせたら、漸く、彼れも納得して、涙ながらに、我が領事館を立去つたさうであるが、彼は、其の後家に歸り、母の病氣を看護して居て、天津城陷落の其の翌日、眞先に領事館へ來つて、以前に變らず、忠實に仕へて居たので、記者が、天津に行たる時など、まことに克く働いて居ましたが、是を以つて見るも、濱子夫人の寛仁で、ボーイの樣な者までも、よく、愛し遣つたと云ふ事が分るのである。

六月十八日は、昨日に易らず、早朝より、敵が砲擊を始めたから、居留地內へ、砲丸銃彈は、續々と落下破裂するので、所々に火災は起る、死傷は出來る、實に悲慘なる光景となつて、軟弱なる夫人連は、震ひ怖れて了つて、泣くより外に、詮術もなき有樣であつたが、濱子は、何思ひけん。短刀を懷にして領事館を出で、英國の工部局へ馳せ行きたるが、我が領事館から、英の工部局迄は、近い所であるけれども、敵彈は、殆ど絕間なき程來るので、中々普通の婦人には、此の中を步行と云ふことは、容易に出來ないのである。濱

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子夫人は、素より、雄々しき性質である上に、死を決して居るゆゑ、些しも怖れずに、唯一人行きて見ると、玆處に避難して居る内外婦人は、澤山あつたが、其の中に、一人、支那婦人の日本服装したのが居る。其れは、如何なる婦人かと云ふに天津に、國聞報と云ふ日本人西村博氏の發刊する新聞があつて、其の記者に、方若と云ふ支那人がある、其の妻君で、名を小豹と云ふ婦人であるが、日本語を頗る巧に話すので、知らない人は、日本人だらうと、疑ふ程である。或日、濱子夫人は、小豹女に向ひ、

濱子「貴女は、如何して爾、日本語を、巧にお談しになりますか。宛で、日本人の通りでムいますよ。」

と云つて尋ねたら、小豹は、莞爾と笑つて、

「妾、極く幼少時から、日本神戸へ行つてました。それ故日本語が出來ます。皆さんが、妾のことを、混血種だらうなんて、惡口を被仰いますが、妾は、決して爾ではありません。」

と應へたさうだ。何でも此の婦人は、神戸大阪邊に長らく居て、日本語を能く談るばかりでなく、氣質も、殆ど日本婦人の如く活潑であるが、良人の方若も又、支那人でこそあれ、世界の形勢を能く知つて居て、文章も中々巧いから、國聞報の主筆をして居る位で、夫婦共、支那人としては、珍らしい開化人である。其れであるから、義和團や頑固ある支那人の爲に、憎み怨まれ、附狙はれて、終に、日本領事館へ遁れ來つたのを、又、此の工部局へ、日本婦人と共に移して、避難させたのであるが、小豹は、濱子夫人の來りしを見て、左も喜ばしげに笑を含みて、

「介闈、妾貴女の、御無事なお顔を見て、稍と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

安心しましたわ。昨日、令閨が妾共を、此の工部局へお連れになつて、爾して、又領事館へお歸りになつたが、夫切りお越しがないから、マア、如何なすつたらう、若しものことがありはせぬかと、實に心配しておりましたわ。」

濱子「有難う。妾は、又皆さまのことを心配しましてね、中には妊娠をなさつて、恰ど、臨月の方もゐるから。それで、最と早く、昨日の中に一度見に來ませうと思ひましたが、何しろ領事館の方が、ボーイや何かが、皆逃出して了つた者ですから、不人になつて、食物の世話をする者もなく、ツイ、來ることが出來なかつたですが、皆樣も御無事で、マア宜しう厶いました。」

と云ひつゝ、其處に居る婦人連を見ると、悄然と萎れて居る婦人もあれば、愁然と悲しむで居る女子もあるが、中には、活潑に雄々しく働いて居る人もあるから、濱子は、氣丈な婦人だけを撰んで其の人們に向ひ、

濱子「貴女方に、妾しは御相談がありますが、それは外でもありません、是から、段々負傷兵も殖えて參りまするが、此の人々は、皆、貴女方や妾共を救助するため、敵と戰爭つて負傷したのだから、眞に妾共に取りましては、此上もない恩惠の深いお人們であります。其れであるのに、其の人々の苦痛するのを見ながら、手を束ねて搆はずに居ると云ふは、いかにも、不徳義なことであると思ひますから、お身體に異狀のある方は仕方がありませんが、何とも無いお人達は、情願、妾と共々に領事館へ歸つて、力を協せて、負傷兵の看護をして戴きたいと思ひますが、如何で厶います。」

と云ふと、彼の小豹女は、第一に進み出でゝ、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「妾も大賛成あります。」
と金切り聲で叫んだので、一同思はず失笑したさうだが、中に、洋人妾も十人ばかり居たさうで、之は云ふまでもなく、日本婦人が、橫濱、神戸或は長崎邊で、西洋人の妾と爲り、其の旦那に連られて、天津に來りし者で、中には、其の旦那が不在であるから、外國領事より日本領事へ照會になつて、引取つてやつたのもあるし、又、自ら逃込んで來たのもあるさうだが、中々活潑な女があつて、

○「若し令閨。妾們は女でこそあれ、日本魂はありますから、此樣薄暗い穴藏などへ這入つて悄れて居るより、負傷兵の看護でもした方が、餘つ程増しで厶いますわ。」
と斯ういひ出した洋妾があると、是に負けぬ氣になつて、又一人が、

△「奥さん。妾なんか、看病なんていことはしたことがないから、出來るかなんだか知れませんが、炊事の方なら引受けて行りますよ。」

□「炊事なら、妾も行りますわ。今こそ洋妾で、怠惰者になつて居るが、ナアに、一ッ腕を奮へば、昔し取つた杵柄だもの、怎う見えても、素性を洗ャア、元は橫濱の某家に、飯炊奉公の一年近くもした女です。だから、妾なんか、炊事の方なら聯隊長ですよ。」
なんかんと、調子にのつて、己の耻まで曝け出すものもあつた。之を聞いて、濱子夫人も、思はず失笑して、

濱「オホヽヽヽヽ。マア、如何も威勢の好いことね。流石に、日の本の婦人方だけあります。では、情願、其の思召で、それこそ、一つ、皆さんお腕を奮つて下さいましよ。」

洋妾、奮ひますとも〳〵。腕でも、肩でも、足でもお尻でも、何處でも大奮ひですよ。」

と、勢好く濱子夫人に從つて、領事館に返り來ると、彼の支那婦人小豹も共に參つて愈、之れから、炊事や看護に從事致しましたが、如何しても、恁う云ふことは、男より女に限るので、先、炊事のことから一二演べて見ると、米は、支那米が澤山に買ひ込んであつて、それを男兒の人々が人力車若くは荷車を以つて、朝未明か、日暮れて後に、領事館へ運んで來て炊ぐのだが、男兒が行ると、火の焚き加減から、水加減が能く分らないので、飯が、半熟になつたり、お粥の樣にあつたり、又は、全然、眞黑に焦して了ふことが、度々あるので、籠城者も、之には閉口して居つた所、丁度、此の婦人連が歸つて來た。

やれま籬（三）

唐扇

それからの私は、實につまらなくなつた。祖母さん二人は、疾うの昔に亡くなられて、家内は三人だけである。誰は如何だといふ事はないけれども、兎に角、面白くないのである。御母さんの御身體と共に、世の懷中は冷えたのであらう。中學へ入つてからは、數學が出來なくて、人の後にばかり居たが、けれども、其の不快は、不快中の十分の一にも當らなくて。

面白くなくなつて、初めて、御父さんに逢つて見度いといふ念が起つた。今迄は、私の御父さんはといふ怪訝の思ばかりで、格別逢つて見たいといふ念は無かつたが、つまらなく成つて、初めて、御父さんに逢つて見度くなつたのである。けれど

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も、其の逢ひたいのは、胸の熱情の抑へきれず、如何しても逢ひたいといふではなくて、何か、面白い事のありさうなものだと思ふばかりに、一寸、逢つて見度いのである。一日たりとも、御父さんの恩を受けて育つたら、餘もや、かばかりではないのであらう。それで、私は思つて居る。親子間の情合は、養育の恩一つにあつて、生みの恩などは、何も關係ないものだと。私ばかりを證據に、さういふのではない。彼のさと子は、育てた上は可愛で離されぬ。子も亦、乳母を慕つて離れぬではないか。産まぬ間でさう濃かだ。養育の恩一つにあらう。又、彼の繼子は、繼母を嫌ふ、繼母も亦可愛がらぬ。産まぬ仲に於いては、彼も是も同じだが、是の違ふ譯は、間に、異なる感情の差挾まつてかは知らぬが、養育の恩を積まぬからで、是も産れ落つるとから、自分の手で育てたら、乳子や實子と違う所がなからうと思はれるが、果して、如何なものだらう。』逢つて見度くなつて、御父さんの消息を知り度くなつた。けれども、いひ出で、、人に問ふ迄に知り度いのでもなくて過す中、知るに、甚だ便宜惡くなつたのである。それは、一家擧つて、他鄕へ去らねばならぬ事になつたからで。

兄さんは、中學を廢されてから、敎員もされ、實業にも就かれ、色々な方面へ手を出されて、辨護士試驗、判檢事試驗も受けられたが、事々成功を見ずに終つた結果、地方に新聞を起こされたけれど、これも失敗に歸したので、縣下の一新聞に行かれる事となつたのである。二十九年九月廿日といふに、家内一同、住み馴れた故山を後にし、永年世話になつた人々に別れを告げ、山河越えて、十二里ばかり奥の其の地へ移つた。

故郷よりは、數等賑やかな地だが、心の友とて、誰一人見付からぬ身には、實につまらないのである。殊に、異山の景も見盡しては、面白なさ遣る瀬がないに連れて、彌増し、御父さんに逢つて見たらばと思はれて、知りたいけれども、兄さんは知らぬもの、委しく知るは、大野の祖母さんだけと思つて居たので、又、全くさうであつたので。其の翌年の暑中休暇、一年振で歸省した。豈計らんや、大野の祖母さんは、重き病の床に就かれて、居たのである。否、御病氣といふ音信はあつたけれども、これ程とは思はなかつた。朝夕觀て居る眼には、際立つて知れまいけれども、一年も會はずに見た眼には、愕かれた。肉落ち骨と皮ばかりの樣で。去年の老いて艶々しい面影は、更に無いのである。私は、悲みの念胸に充ちて、晝夜離れず看病した。風吹いて燈火細き、あゝ其の伽の一夜、いひ出るともなしに、祖母さんは、枕頭の私を顧み、今迄曖昧の思に過した、御父さん御母さんの上を語られたのである。

私の御父さんといふは、長橋の三男で、御母さんと同時に來て、小山家を相續された。難かしい家を統がれたのは不運だが、殊に、不運なのは御母さんで。他に澤山あつた然るべき緣を棄て、撰りに撰つて、難かしい家へ緣付かれた理由といふは、小山家は、子が無くて血統が絕える。遠く家系を調べて見ると、大野家に血筋があるから、是非にと所望されて、無止、緣付かれたものゝさうである。

相續はされたものゝ、其の通の舅姑であるから、御父さんは、常時、不平をいはれて居たさうである。それで、祖父さん祖母さんは、御父さんていふと、兎角お嫌ひで、色々な難題をいはれたけれど

も、御母さんは氣に掛けぬ性とて、何事も、はい〳〵と盡された爲め、さう惡い顏はされず、從つて、御父さん程は、難かしい事もいはれなかつたさうである。

晝夜こき使はれ、夫婦しつぽり語合ふて、憂さを慰める隙とても、殆どない位なので、御父さんは、怖しい眼を盜み〳〵、他に快樂を求められたさうである。他へ使ひに出られた序などに、大酒を飲んで、前後も解らぬ程、醉ふて歸られる事の度々あつたに、其の事を、舅姑に知られては大變なので、御母さんは、二人へ知れぬ樣、家へ入れて密々濟された。其の御心配は、並大抵なものではなかつたさうである。御母さんに御心配かけでも、家内其の有樣であれば、御父さんの行のこればかりであつたなら、止むを得ぬ事とも、いはゞいはれ樣か。

十年ばかり居て、御父さんは、遂、離縁されたさうである。御母さんに何の相談も無しに、其の難かしい姑舅の側へ、一人の子と、明日〳〵生れ樣とする私を附けて、御母さんを置いて。さうと知られた時の、御母さんの御心はどんなであつたらう。かくと知らせに實家へ來られた時、祖母さんは、泣いていはれたさうである。あゝ私が惡かつた。親の愚ばかりで、お前は其の憂目を見る。母が謝罪る。何卒堪忍して吳れ。此の上、少でも樂はさせたいけれど、遺つた子は何よりの寶、後に、夫だけは迎へずに居て吳れ。第一は女のたしなみ、第二は子の爲め、世間に能くある、繼親の辛さを子に知らせまいために、何卒〳〵、操を立て徹して吳れよと、實、手を合せて拜まれると、御母さんは、皆迄聞きも終らずに、私も元より其の考で、後夫を迎へて遣るからとの御言葉であつたけれ

ど、一人で置いて下さいと、さう申上げて、其の事に定めましたから、御安心なさいましと、更に悲みの色も無い樣に、仰せられたさうである。子を樂みに、姑舅の笞の下に止る決心をされたのはいふ迄もない事で、御年が僅に二十九のとき。離緣すると直ぐ、別に妻を迎へて家を持たれた。私が御父さんに逢つた其の家の女で、其の頃は、隣家に住んで居たさうである。今は、會津の近在に居られて、子も數多あるが、初のは女で、私と同年とは何の事であらう。私は四月生れ、月充ちて御父さんに別れたに、私と同年の子のありやうがないではないか。忽ちさうかと、胸に首肯かれた。同時に、御母さんの在世中や、親子の間の餘りに他々しかつた事や、並に、今迄御父さん御母さんの上に付いて、氣が澄まなかつた總ての事が、悉皆腑に落ちたのである。かくと知るや、私は齒を嚙み緊めて泣いた。あゝ、私の御母さん程、世にも不幸な人はあるまい。仇し女故に、御父さんには棄てられ、後に夫も迎へずに、二人の子を養つて、無慈悲な舅姑に事へられた、御辛苦はどんなであつたらう。さういふ次第と、せめて御在世中に知つたなら、もう少しは心を盡し、御意を慰められたらうを、御在世中は、仰せに背いた事も度々あつた。御意を惱ました事も度々あつた。何程か、情無いものと思ひなされてあつたらう。私は、實に腑甲斐無い者であると、吾が身の不束を責め苛まれて、あられぬ思すると共に、傍には、又忌はしい感が募つて、浮氣者、薄情者、人でなしと、御父さんを罵り、そんな御父さんなら逢ふ事はないと、御父さんに逢ひたいといふ念は、忽ち消えてしまつたのである。

程經て御父さんから、生れて初めて消息があつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

否、御父さんから直接ではない、長橋からの傳信である。父ある人は、病危篤といふ事であつた。けれども、格別驚きもしない。見舞の手紙一つ遣らぬ。御父さんの事といへば、一端いひ出でゝさへ、不快な顔をされた、御母さんの心に對して濟まぬからである。間も無く、亡くなられたといふ報知が來た。けれども、私は行かぬ。生きて居られた中でさへ、音信一つしなかつたものが、亡くなられたからとて、今更行かねばならぬ、理由がないと思つたからである。それから今迄、相異らず音信した事なく、異腹の兄弟なるものが、如何して居るか、更に知らぬ。人は何とかいふであらうか。けれども、兄さんは知らず、私は、御母さんの手一つに育てられて、人と成つたものだから、御母さんの心を以つて心とするは、一番の孝行だらうと思ふが、さうではあるまいか。

大野の祖母さんが亡くなられて、四年目の冬に、

小山一郎しるす。（終）

雜報

紫雲靉靆

●神宮還座式　去る二日午後五時、奉還勅使藏田掌典は、扈從副從を隨へ、宮内省より差廻しの馬車にて、警部に前後を警衛せしめ、内宮に參向せらる。域内には、儀仗兵一中隊捧銃の禮をなし、冷泉宮司以下の神官、第二華表内にて、修祓の式あり。板垣御門より内院に進み、八時、御還座式滯りなく濟みたる由。

●後桃園天皇御例祭　去る六日は、後桃園天皇

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御例祭に相當せるを以つて、京都泉山なる後月輪御陵に於いては、中川諸陵寮京都に出張し、所長齋主を奉仕し、嚴かなる御陵前祭を、御執行あらせられたりといふ。

●御救恤●●　客月十四日、北海道釧路國釧路町火災の趣き、憫然に思召され、天皇　皇后兩陛下より、御救恤として、金五百圓を御下賜あらせられ、また、愛媛縣西宇和郡神松名村大字名取、火災の趣き憫然に思召され、この頃、兩陛下より、金三百五十圓御救恤として、御恩賜あらせられぬと承りぬ。

●東宮輔導御專任●●●●●　東宮輔導たる海軍中將、有栖川宮威仁親王殿下には、海軍々令部出仕、兼、海軍將官會議員を免ぜられ、特に、終身現役に列せしめられたるが、それは全く、今後、東宮輔導の大任を專任せられたる故なりと承りぬ。

●內親王殿下の御避寒●●●●●●　常宮、周宮、富美宮、泰宮、各內親王殿下には、來む二十四五日頃より、小田原、葉山地方御用邸に、御避寒あらせらるるよし承りぬ。

●新濱の鴨獵●●●　去る四日午前十時、新濱御料場に於いて、各國公使等に、鴨獵仰付けられたるにつき、閑院宮殿下を始め奉り、露、英、獨、米、蘭等の各國公使、同夫人、書記官、武官其の他宮內官には、田中大臣同夫人、香川皇后宮大夫、三宮式部長等、午前六時頃より東京を發し、御獵場に赴き、小憩後、直に開獵したり。此の日天氣宜しかりしため、獲物非常に多く、正午、場內に於いて午餐を賜り、午後再び開獵して、四時頃より各員歸途に上りたりとぞ。

●後水尾天皇御宸蹟●●●●●　後水尾天皇御宸蹟、即ち、『東照大權現』の一軸は、其の昔、紀州侯へ賜りしものにて、後、同藩延井宮門の手より、大谷儀兵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

衞氏へ贈れたるものあるが、大谷氏は、今回、之を日光廟へ納めて、永く保存する事とあせしとぞ。

●廣島市の献上屛風　廣島市より、東宮御慶事奉祝の爲め、献上せんとする金屛風一双は、大坂東區北久太郎町四丁目、樋口彥右衞門方にて調製中の處、既に出來上りたる由にて、屛風は、高さ八尺五寸、幅二尺五寸、長さ一丈五尺の特別大形にして、金箔(五寸三分)を表に重押しとあし、縁には、菊花御紋章一双八十六箇宛を飾り、別に羽二重に、金絲の御紋章を縫取りたる覆ひを添へ奉り、結構の善美、目を驚かすばかりなりといふ。

●御歌會始役員被仰付　來年、御歌會始の諸役員は、左の如く仰付けられたり。

●讀師　從一位德川慶喜●講師　正三位子爵前田利鬯●發聲正三位子爵綾小路有良●講頌正三位伯爵大原重朝、正四位子爵大宮以季、正四位子爵水野忠敬、正五位男爵本多親雄●尙講師として、從二位公爵二條基弘氏仰付らる。

●紀念碑　江州長濱の慶雲館と云ふは、同地淺見又藏氏の別墅にて、去二十年頃、兩陛下の御休憩所に充てられ、次で、行在所とありたる光榮を荷ひたれば、淺見氏は、明年四月を期して、庭園に一大紀念石を据ゑる事とし、其の撰文及び揮毫を、此の程、佐野常民氏に請ひたりといへり。

綾羅錦繡

●感ずべき老人　不知火の筑紫潟は、神功皇后が、征韓の御偉蹟、香ばしく香椎の宮に殘り、弘安の役には、百萬の胡兵を鏖殺して、蒙古來の一曲、魂飛び、肉躍るを覺ゆ。されば、其の地に住める人々も、自ら海國の念深くして、一朝事あれば、御國の爲め、海底の藻屑と化するも辭せず。との心、いと頼もしかりけるが、そが中にも、筑紫郡二日市町大字二日市千二十一番地、平民山内源吉の父、左六と云へるは、當年七十八歲の高齡に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して、頭には霜をいたゞき、腰は梓の弓のごとくあれども、國を念ふの赤き心は、年と共に朽ちざるのみか、折あらば若者を集め、年老いたれども、此の左六、イザ御國の大事と聞けば、眞先に走せ參じて、叶はぬ迄も働かん決心ありと、罵り勵ますほどに、若者も其の風に化せられて、忠君愛國の志に富みたるが、過ぐる三十一年の頃とかや。富士八島等の艦隊、博多に入港して、一般の拜覽を許せしかば、左六老人も、町内の甲乙を伴ひて、富士艦に參り、拜觀したるが、さすがに東洋無双の軍艦とて、艦體の大なること、宛然山を築きたらんと思はれ、左六老人、大に驚きけるを、乘組の士官懇切に案内して、丁寧に説明をなしたれば、老人大に感動して、忠君愛國の熱情、胸に溢れ出で、製艦費として、若干の金員を獻納せんとせしも、家貧しくして、即座にとゝのへんの難きより、

遂に、一大決心をなして、其の翌日より、七十八歳の老體を以つて、草鞋を造り、其の餘を貯蓄して獻納せんものと、朝は、はやくより起きて藁をすべ、夜は遲くまで寢ねず、燈火盡くれば、窓漏る月を燈火に代へて、夜業を續け、家人等が、老體に障らんことを恐れて止むれども、老人、なかなかに聞入れずして、一生懸命に精勵して、草鞋の多く出來上るを樂みとなせしが、それさへ奇特なるに、老人は、此の事を思ひ立ちしより、只、一の樂みとせる晩酌をも廢して、其の代を貯へ置けるが、遂につもりて、草鞋の代を合せ、昨年十二月迄に、五圓以上となりたれば、此のさき、尚ほ、貯蓄を怠らざる精神なりしが、老年の身なれば、いつ、病氣死亡等により、年來の素志を、果たすを得ざることあらば遺憾なりとて、同町役場へ現金持參にて、製艦費中へ献上の旨願ひ出でぬ。然るに、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

老人は、其の後容態すぐれず、本年の秋、七十八歳の高齢にて病死をなしたるが、臨終の際には、その子、源吉を始め、一家の人々を枕元に集め、該金献納のことに就き、呉々も遺言せしかば、源吉は、今回、同町役場を經て、知事に向ひ、献納の儀を申出でたりといふ。いとも珍らしき、こゝろがけとこそいふべけれ。奢りにのみふける人々の、これをみなば、將に愧死すべし。

●老農綠綬褒章を受く　善行によりて褒章を受るもの、近來、多くありたるは、喜ばしきこと、やいはまし。こゝに、愛知縣丹羽郡豊秋村の水越理三郎といへる老農は、夙に、志を農事に傾け、拮据黽勉して衆を誘ひ、遠地の穀種を集めて之を試作し、播種、栽培、耕耘等の良法を尋ね、汎く、郡村に歴説して民心を勵まし、農事改良會種子交換會、農談會等の開設ある毎に、推されて、會長若くは講師となり、或は、各地の招聘に應じて、農事改良の緊要を講演し、爲めに農事に勵むの美風を養ひ、殆ど七十年の間、其の身老衰に及ぶも、敢て怠らず、洵に衆民の模範たる者なりとて、今回、賞勳局より、綠綬褒章を下賜せられたるが、氏は、文化十年の生にして、本年實に九十歲の高齢なりとぞ。

●子爵夫人の鑛毒地行　舊丹波福知山藩主、朽木子爵の夫人は、德川慶喜公の孫女にして、夙に才媛の譽れ高く、頗る慈善心に篤き方なるが、足尾鑛毒被害地窮民の慘狀を聞き、憐憫の情禁ずる能はず、被害民慰撫の爲め、子爵母堂郁子と共に、此の程、其の地方をば廻られたりといふ。いとも美しき御心根といふべし。

●故大橋佐平氏の香奠寄附　同氏は、豫て、自身の葬式を極めて質素にせんと欲し、香花香奠、

其の他、一切の贈品を堅く謝絶すべき旨遺言したるも、尚ほ、香奠其の他の寄贈品少なからざりしより、遺族は大いに之れが處分方に困めしが、幸ひ、大橋圖書館は、大橋家と離れて、獨立の財團法人と爲し、社會の公益に供するものなれば、寄贈の香奠及び、其の他の物品を代償に換えて、悉皆、同圖書館の特別圖書購入資金として、寄附する事となし、其の圖書に限り、一々事由を附記したる印章を押して、寄附の性質を明示し、永遠に傳ふるといふ。

東西南北

●開校紀念日　東京淺草區なる待乳山高等尋常小學校は、明治廿一年頃には、在校生徒僅に、百三十名許なりしが、その後、新築に着手し、尚ほ、明治廿四年九月、現校長佐藤卓爾氏就任せられ・同十二月五日、その落成式を擧げたるに、當時未だ、百五十名の生徒に過ぎざりき。かくて、同校長の學事を奬勵し、校務に盡瘁せられたる結果、爾來、益〻盛大となり、現今にては、實に、七百八十名の生徒を收容するに至れり。去る五日は、その開校紀念日に當れるを以つて、日本女學校長西澤之助氏を聘し、修身講話を希ひけるに、なか〱益あるものにて、嘗て、本誌にて紹介したる唐辛屋の老婆も出席したりとぞ。

●鑛毒地幼女病者救護　矢島楫子、三輪田眞佐子、潮田千勢子、島田信子、山脇房子、松本英子、其の他婦人會諸氏の盡力にて、鑛毒被害の最も甚しき、群馬縣邑樂郡海老瀨村、及び、谷中村に於ける被害窮民の幼女を引取りて、獨立生活の道を敎へ　又、病者をして、治療を受けしめん爲め、上京せしむることゝなり、去ぬる日、左の數名上京、芝口の鑛毒事務所に着したり。幼女等の、遠く両親の膝下を離れたる悲みを忘れて、只管喜合へ

るを見ても、日頃窮困の狀を察すべしとぞ。

群馬縣邑樂郡海老瀨村窮民幼女　松本ヒャク(十二)小林チカ(十三)須永ツル(十五)小林トモ(七)石田トメ(…)齋藤キサ(十三)大塚キヨ(十)橋本セキ(十)小森谷ハツ(十二)平石モン(十二)平石イヨ(十)
栃木縣下都賀郡谷中村下宮同　茂呂富知(十五)茂呂ヒロ(十八)群馬縣邑樂郡海老瀨村窮民乳汁缺乏婦人　長谷川ツマ(廿六)携帶兒藤一郎(二)須藤リン(廿四)携帶兒幸一郎(一)栃木縣安蘇郡堺村大字高山病者 山口啓平(廿五)

○女子美術展覽會褒賞授與式　本月十日執行せられたり。來賓は、正木東京美術學校長、藤田女子美術協會長、其の他十數名、副會頭佐藤靜子より、褒賞を授與し、終つて、同氏の祝辭、津田房子の答辭ありて、式を終えたり。受賞者は、銀賞編物テーブル掛、津田房子、協賛銀賞、青山女子手藝學校、銅賞、日本畫六人、油畫二人、書一人、彫塑一人、刺繡一人、摘み細工一人、金彫一人、立花二人、生花五人、一等褒狀二十人、二等同六十八人、三等四十九人なりしと。

●本年の麥作付反別及收穫　農商務省の調査したる處に據れば、本年に於ける麥作付段別は、百八十一萬二千七百八十六町七反歩にして、收穫高は、二千五十二萬九百五十石なり。之れを前年に比すれば、作付段別六千七百八十九町九反歩、即ち、四厘弱の増加にして、收穫高に至りては、十三萬二百七十七石、即ち、六厘強の増加を有せり。又、之を平年に比すれば、作付反別三萬四千百九十四町六反歩、即ち一分八厘弱を増加し、收穫高百十萬三千三百五十九石、即ち、五分六厘強を増加せり。之を地方別にすれば、左の如し。

地方	三十四年	地方	三十四年
東京	石 四五、五三一七	京都	石 二八、三二四八
大坂	四六、三八四四	神奈川	四九、二〇四八
兵庫	八八、一〇六五	長崎	五一、四四六七
新潟	一五、二二九四	埼玉	一一六、二一六七
群馬	七〇、一五二六	千葉	八二、九四二九
茨城	一一八、〇九〇一	栃木	七一、六五四六
奈良	二五、六四九九	三重	三二、〇〇八六

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

愛知	八八、四八一一	靜岡	五九、七一七七
山梨	三九、九八〇一	滋賀	一四、九四〇六
岐阜	四七、二五三六	長野	五四、五〇七一
宮城	四〇、三六二五	福島	二九、二六八〇
岩手	三二、三二三五	青森	三、七三八四
山形	七五、三〇九	秋田	一、八六六四
福井	九、二四三四	石川	一〇、一一七三
富山	四、七三七六	鳥取	一七、七三三三
島根	二六、八二七四	岡山	七一、五五七六
廣島	七四、三八八〇	山口	五五、一三四〇
和歌山	二五、三四八八	德島	四四、七八一七
香川	五二、九八七四	愛媛	五三、三七〇四
高知	一六、四〇七七	福岡	七四、〇二一一
大分	五二、一四四五	佐賀	三八、〇七八七
熊本	八七、七八三九	宮崎	一六、三一二七
鹿兒島	三三、七四四三	沖繩	八二九六
北海道	二五、七三六〇	計	二〇五二、一九五〇

右の內、平年作より減じ居るは、東京、新潟、群馬、滋賀、長野、青森、福井、石川、鳥取、和歌山、高知、福岡、熊本、宮崎、沖繩の一府十四縣にして、他は皆、增收の見込ありといふ。

●僂麻窒斯病の新療法　有名なる維納の醫學者、テルツ博士は、蜂の毒を以つて、僂麻窒斯病を、治し得べしと主張し居れり。博士の說に據れば、僂麻窒斯患者の身體は、蜂に刺さるゝも腫れざる由にて、博士の新療法は、此の事より發見したりとぞ。

●世界の最年長者死す　世界の最年長者は、此の程、希臘アルバニアの、タチ村に於いて死去せり。其の名をイスマイル、フッジョーと稱し、百六十歲なりしが、臨終の時まで、矍鑠として、壯者も及ばざる程の氣力を有し、齒は、一本も拔け居らざりしと。また、其の子孫は、二百人ある由。

●獨逸の書籍出版數　獨逸に於いて、每年出版する書籍の數は、英米佛の三國に於いて、出版する書籍の數を合せたるものに同じ。かくて、一昨年の獨逸書籍出版數は、二萬三千七百三十九部にして、之を類別すれば、字書及び書籍解題の類、四百二十六部、神學の書、二千百四十四部、法律

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

及び政治の書、二千〇七十八部、醫書一千五百七十二部、理學及び數學の書、一千二百七十五部、哲學の書、二百八十三部、敎育に關する書、三千六百三十三部、言語及び文學に關する書、一千四百〇六部、歷史に關する書、一千〇五十四部、地理に關する書及び地圖の類、二百九十六部、軍事に關する書、五百五十五部、商業及び經濟の書、一千四百〇九部、工業及び建築の書、七百六十部、農業及び森林の書、八百九十九部、美文の類、三千〇六十一部、美術の書、七百十一部、曆の類、六百三十一部、雜書、六百三十部あり。斯く出版部數の他より多きは、獨逸人自身にも必しも、實質の優れるものありとは信じ居らず、而も、日々、六十六部の出版を見るに至りては、文學的生產力の多大なるに驚かざるを得ずといふ。

●電信機改良者の死去●●●●●● ブダペスト發の報に據れば、ウイロックは、三十一の齡にして、十一月同地に病死したる由。ウイロックと云へるは、ボロウクと共に、電信機を改良して、一時間に、八萬語の音信を通じ得るものと、爲したる人にて、此の發明は、今や、漸く完成を告げたるばかりなるに、發明者の逝去を聞くは、いと悲しむべきことありと。

●船暈の治療法●●●●● 片眼を閉づるときは、船暈を豫防し得べしとの事なるが、獨逸エルランゲン大學のハインツ敎授の說に據れば、船暈は、腦の下面が、非常に感じ易き性質を有するため、直に、胃に影響して、不消化を起すに在りとし、此の銳感を奪ふには、深く呼吸するを以つて、足れりとする由なり。此の說、眞なりとするも、實行には困難あるべしといふ。

●落葉籠

一、字体は楷書に限る。但、漢字の外はすべて平假名にて、變体假名を用ゐるべからず。

二、文体は投稿者の隨意なれども、一字廿二字詰、五行内外の事。但、可成フリガナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は差支なけれど、便宜の所へ、必ず、宿所姓名を明記すべし。

四、記事は隨觀隨目何にてもよけれど、有益にして興味あるものを望む。

五、〆切期限は、月次兼題の歌文と同日の事。

用紙は半紙。尤も、ハガキにてもよし

▲東京、ちどり子、　東京とし子さん、大八州學校の方は存じませぬが、女學會の講義録は、十一月より、第三回後期と、第四回前期が、あらたに發行になりました。

▲和歌山、とし子、　書籍と懸物とに、虫がついて困ります、それを除く方法を敎へて下さい。

▲和歌山、とし子、　和歌と禮法との通信敎授をする先生はございますまいか、片田舎の事とて、習ふに師なき有様でありますれば、御存じの御方は、どうぞ當欄まで。

▲大坂、かね子、　或女學雜誌投書欄内にて、女子の作名を記した一叙事文に感心しまして、その人に手紙を送り、交際を求めて、種々文章上の事を敎はつて居ました處、女子とあつた其人は男子で、傍から、とんだ禍が生じました、諸嬢も充分注意なさいよ。

▲札幌、きみ子、　女子は成るべく漢語などをつかはぬ樣、耳ざはりやさしく、話さなければならぬものと思つて居ました。此の夏、下田歌子先生の御來道になひ、先生の演説を聞きましたら、大分漢語が交つて、少と年古けた奥樣方には、解るまいと思ふお言葉が澤山ありましたが、私等も如彼漢語を使つて宜しうございませうか。

▲記者、及ばぬ迄も、誰れにもわかる上品な言葉をお使ひなさへ、學問積んだお方は、出すまいとしても、思はず知らず難かしい言葉が出るので、止むを得ないのです、まだ修業も積まないのに、殊更、難かしい言葉などをつかつてはいけません。

▲山形、靜江子、　私の妹の組に、身持ちが惡くて新聞に出された、一人の女學生がありましたが、組の全生徒は、私等の仲間から、こんな人が出たのは實になさけないとて、其の一生徒を中に圍んで、大泣きしたさうです。田舍は、まだ女德の失せぬではありませんか。

▲東京、あでし子、　其の後諸孃は、如何御暮らし遊ばしますか。一日も早く、御面會、致し度く思つて居ましたところ、事によりますと、此の地を遠く離れて、諸孃に、お分袂せねばならぬ身となるかも知れません。まことに悲しい事で御座います。只此の上は、彼の會の速かに成立致す樣、陰ながら祈つて居ります。就てはとし子孃、しゆん子孃、よしの孃、其の他御贊成下された孃の、お寫眞を頂きたう存じますが、もし御惠み下さいましたならば、此方からも差上げ申します。

▲東京、ちどり子、　米澤花子さんは、資金がなきため、御自分で金を拵へて學問なさりたいとの仰せは、誠に感服致しますが、交換局あたりへ出て、傍ら學問をなさるのは、中々苦しからうと思ひます。第一學問して、何にお成りなさる目的ですか。それを伺ひたう存じます。

▲記者、交換手は、一番言葉が大切ですから、東京では江戸ッ子の粹を撰んで、田舍者は採りますまい。

▲松山、はる子、　御誌の兼題歌文に、高點を得らるゝ御方々の、年齡を知りたく思つて居ましたが、南海みどり子さんの仰せの如く、御肖像を掲げになりますと、年齡も御容子も共に知られて、遺憾なく思はれますが、如何でございませう。

▲東京、ちどり子、　東京よし子さん、御年はお幾つですか、お年がわからなくては、答が出來ませぬ。また御問の、靴と下駄とは、歩き善い事は、靴の方がまさつて居ますが、經濟は、下駄の方がまさつて居りませう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

題字と口繪につきて

題字

こは、高崎正風男のものせられたるなり。男は、目下病にかゝられ、諸方よりの需を拒絕せられ居るにも拘らず。特に、諸媛のために、その乞を入れ、茲に揭ぐること〻なしぬ。さて、男爵は、天保七年七月廿八日、薩摩に生る。當時、幕末に際せるを以つて、天下擾亂、男、身を抛ちて王事に勤勞し、櫛風沐雨その丹誠を竭しけり。後、諸官を經て、宮內省に遂に奉職し、三十年來なは一日のごとし。

現今は、樞密院顧問官兼御歌所長正三位勳一等にして、その和文和歌に長ぜることは、既に諸孃の知り給ふ所、卷頭の歌の意味深遠有益に、且、諧調流麗なるを見ても明かならむ。

北白川宮妃殿下の御肖像及び臺灣神社

卷頭に揭げ奉れる、北白川宮妃殿下の御肖像は、去る十月、殿下が、臺灣神社鎮座式御參拜の爲め、御渡臺遊ばされたる節、同地にて、御撮影相成りたる最近の御眞影にて、坊間得て求むべからざるもの。英邁眞率なる殿下の御丰姿は、躍如として、誌上に動き給ふを見る。また、臺灣神社の圖は、同社の全景を示したるものにて、御鎮座式御擧行の際、撮影したるものなるが、神社は、臺北劍潭山の高地をトして設け奉り、同市中、尤も、形勝の地なりと云ふ。尙は、右は寫眞と共に、殿下御渡臺に關する御紀行をも揭ぐる筈なりしが、都合に依り、之を次號に讓れり。讀者、幸に之を諒せよ。

次號豫告

新年早々、皇孫迪宮殿下の御肖像をかゝげたてまつりて、普く諸孃と、謹て、御聖壽の萬歲を祝しまつらむとす

また、次號より、大に本誌に改良を施し、其の體裁は勿論、殊に、內容の點に意を注ぎ、なほ、一層豐富に有益に、而も、趣味津々たらむことを期す。諸孃、刮目して次號のいづるをまて。且、次號に限り、一月五日なるべきを繰あげて、一月一日に發兌すべし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

増補訂正第六版出來廣告

精神教育 全一冊

定價上製金六十錢郵税八錢●並製金五十五錢郵税六錢

副島蒼海老伯講話

この書は『教育の大本は必や區々たる形式の末を離れて專ら正心誠意に本づき傳神感化の妙用を主とすべきこと』につきて老伯講話のまゝを記せるものなり。其の忠孝の大義を發揮して本邦歷史の特相を説示し。人心の本然を闡明して存心養氣の工夫を懇示し。宇宙の神秘を窺ひて至誠敬天の要を訓誨せられたる。實に當今唯一の倫理教育書なり。發刊以來有識の士競て之を讀む。皆精神教育の明鑑を得たるを喜ぶ。今や五版を重ねて第六版を發刊するに至れり

發賣所　東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地　靜思館　電話本局二千二百七番

増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の酒は直に貳斗とある大金儲的醸造化學作用の一大發明新法傳習望の方は郵券四錢送れば詳細ある傳習手續摘要錄を送呈す

東京市神田區五軒町拾九番地　日本授產館

わきが根治確證藥

何程重き慢性わきがにても誓つて根治し決して再發せざること確證す價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固慢性症根治分貳圓卅錢の參種あり着金即刻送藥す

東京市神田區五軒町十九番地　日新館藥房

血塊月やく忽ち下る確證藥

本劑（藥名調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も忽ち下す特効あり但し妊婦は流產の恐あるに付飲を嚴禁す價六拾錢一圓十錢特別製分貳圓廿錢

東京市神田區五軒町十九番地　日新館藥房

可驚肉色の白くなる新劑

いか程色黑きも本劑用ふれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となること確證す價八拾錢特別製分壹圓四拾錢

東京市神田區五軒町拾九番地　日新館藥房

慢性胃病根治劑

到底不治の難症と斷念せる慢性胃病患者は最終の試藥として壹週分服し見よ忽ち根治確證す價壹週分四拾錢參週分壹圓廿錢

東京市神田區五軒町拾九番地　日新館藥房

腦病根治健忘即治記臆增進確證藥

記臆薄弱健忘腦力乏弱神經系病を根治し大に記臆力を增進す價七拾錢、壹圓七拾錢、貳圓七拾錢特別製分參圓六拾錢

東京神田區五軒町十九番地　日新館藥房

讀め……本書を

豪吟集

寸珍美本　定價金八錢　郵稅金二錢

本集は千葉縣師範學校長弘田正郎氏が現今學生の薄志弱行を歎じプラトン以來の教育風に傚ひ本邦詩歌の中にて萃中の萃を拔いて編著せしものなり今の青年社會勉學の餘暇一本を坐右に置き時に豪吟せば豈ド、一ストライキ節を唱ふるに勝る萬々なるを疑ず

發行所　東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地　株式會社國光社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊發賣廣告

福羽美靜大人序文
下田義天類大人校定
指原乙子女史編纂

女子文章軌範

全一冊
和裝美本
定價金參拾錢
郵税金四錢

本書は上長徳の頃より下明治の初年に至る九百年間に輩出せし名媛紫式部、清少納言、相摸、阿佛尼、鵜殿よの子、弓屋しづ子、三島さや子、荷田蒼生子、西三條實條公後室、柏原氏の母、馬場存義の母千代、梶女、千代能、その女、河内猿子等の傑作中に就き其の最も精を抜き粋を收めて消息、記事、紀行、哀傷、序跋、教訓、論文の七門に分ち毎章末に其の作法を詳解し尚難句古事地名等には一々其の句意語法出所本源を注釋して、我國文の構造及雅趣を會得するの捷徑たらしむ加之普く本書を熟讀せば又以て本邦婦人獨得の長處たる修身齊家の一助たらん是を以て學校用書に適するは論なく家庭の諸媛も亦各一本を得て座右に備へば必ず無比の好伴侶たらん

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

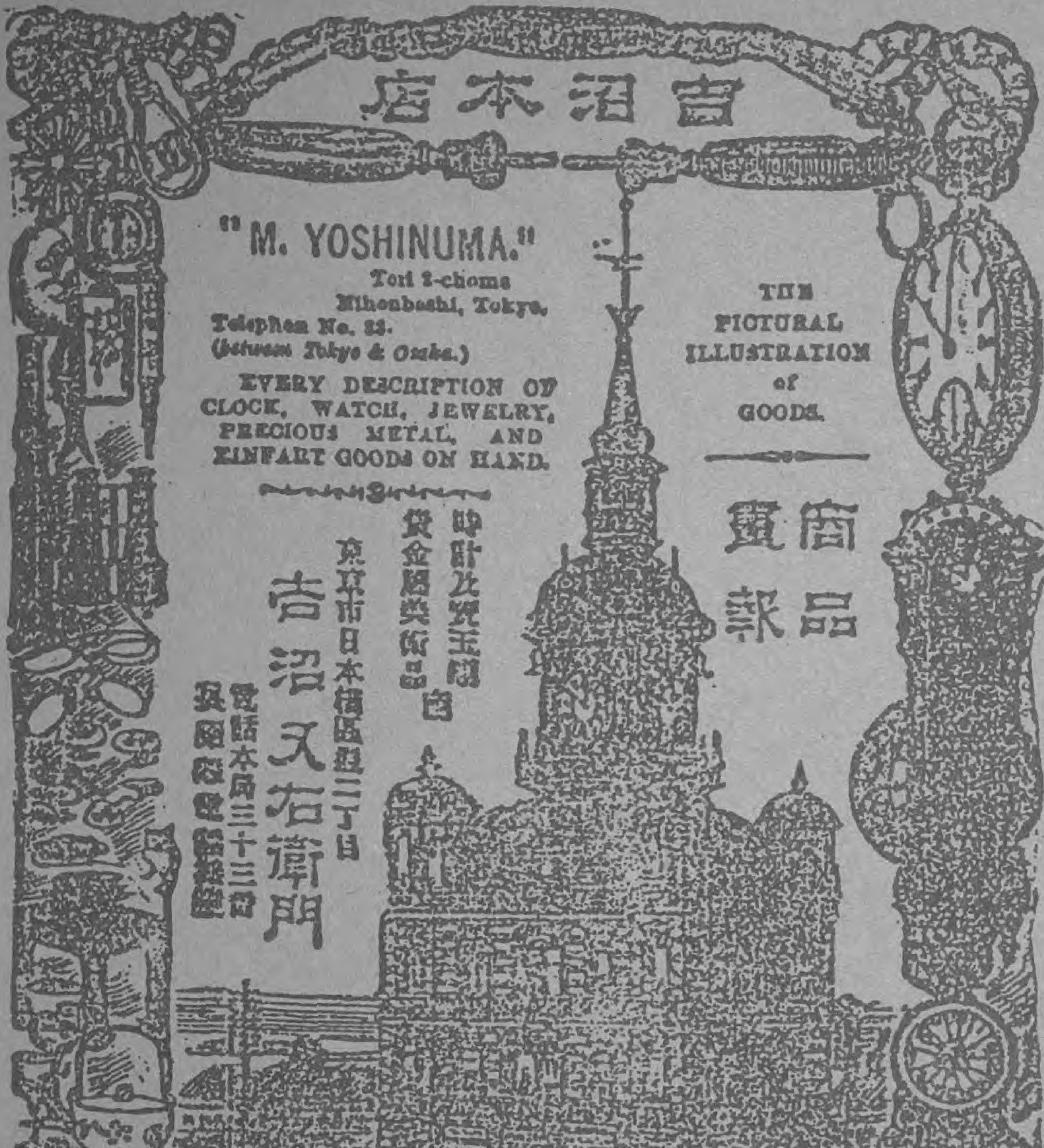
明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可

女鑑

毎月二回五日廿日發行
第貳百四拾參號

明治三十四年
十二月廿日發行

時計は堅牢最新形實用裝飾兼備を撰ぶ
美術品は意匠卓絶製作精妙なり



從來商品は階上にのみ陳列せしが今般
階下も亦陳列場となし總て最廉の正價
を附して顧客隨意御覽撰擇の便に供す

東京築地株式會社國光社印刷部印刷

Digitized by Google
UNIVERSITY OF CALIFORNIA